アイディア・プロレスコラム　ＣＯＬＡ（コーラ）

岡本　悠　Ｏｋａｍｏｔｏ　Ｙｕ

２０２０年７月～12 月下半期。②

まえがき

アイディア・プロレスコラム、
２０２０年７月～12 月下半期②ＣＯＬＡ（コーラ）である。
２０２０年７月～12 月下半期①のＳＰＬＡＳＨ（スプラッシュ）に続く２冊目である。
スプラッシュやコーラという名前は、適当だが、私が、マクドナルドなどに行くので、その炭酸水をイメージしたのかもしれない。

こちらの本、ＣＯＬＡは、確かに、プロレスのことが中心に書かれているのだが、まずは、「アントニオ猪木」から始まって、「プロレスと政治」、「プロレスと教訓」……などといった物が並んでいる。
「政治」というべきかわからないが、人種差別問題や、新型コロナウイルスについて、アメリカ大統領の話、などと私も新しい話題にトライしている。どちらかというと、これは社会問題と言えるかもしれない。ちなみにアメリカの話が多いが。
「プロレスと教訓」というのは響きがいいと思った。

こうして、振り返ってみると、この本のＣＯＬＡには、もう１つの本のＳＰＬＡＳＨには登場しなかった、若手や無名の選手を取り上げている傾向があるな、と思った。

そして、もう１つの本でも多かったと思うが、私の好きな女性レスラーについて、書きまくっているな、と思ったが、これはこれで楽しいのでいいと思った。

私は、今、WWE（ワールド・レスリング・エンターテインメント）、AEW（オール・エリート・レスリング）、新日本プロレス、スターダムなどを追いかけて書いているが、今後はどの団体を追っていくのかはわからない。
この４団体に関しては追っていきたいが、プロレスコラムなどを毎日書いている為、これ以上、違う団体も追いたいのだが、時間が足りないという状況である。

そんなことを小心者のごとく思っているわけではないが、例えば、スターダムは今、女子プロレスではトップクラスに人気のある団体だが、雑誌などを読むと、アイスリボンや、東京女子プロレス……などの女子プロレス団体も人気で、スターダムを浮気するのはいけないな、と思ってしまう。
でも、これ以上女子プロレスラーを愛するのは、多い面も含めて疲れるし、ほどほどでいいやと思ってしまうが。

この度は、２本立ての、ＳＰＬＡＳＨとＣＯＬＡを、楽しんで頂けたら嬉しいです。(終)

目次　Contents

まえがき……００２

１．アントニオ猪木。……００７

①アントニオ猪木が大仁田厚を「『自分のことが弱い』と言っている奴とどう戦えばいい」。
②アントニオ猪木の弟子が弱いと、猪木道場が弱いということになる。
③アントニオ猪木や飯伏幸太は、技を極めるのも、返すのも、パワーが大切だと言う。
④アントニオ猪木の永久電池のビジネス。　いつかそうなる。猪木は時代より早すぎるだけ。

２．プロレスと政治。……０１２

①プロレスを含め、人種差別問題について、考える。
②プロレスと、新型コロナウイルスについて。
③人種差別とリスト。WWE 所属黒人選手が増える。
④WWE の黒人選手中心ユニット、ハート・ビジネスがストーリーの中心で、団体を守る。
⑤プロレスと、ドナルド・トランプ大統領。大統領選挙投票結果は？　ジョー・バイデン氏か？
⑥プロレスを、お客さんのいないところで、やる事について。(コロナ禍)。

３．プロレスと教訓。……０１９

①野村克也の「手を抜かずに仕事をしていることを見てくれている人は、本当にいるのだ」。
②自信のある人間ほど、手当や待遇なども大きく出るのが通例。
③武藤敬司はキレない男のお手本。プロレスで武藤のキレたシーンはすべてフェイク(嘘)！
④“プロレスの力学”と、社会人や学校での、ポジションをまず把握すること。

４．WWE（ワールド・レスリング・エンターテインメント)。

……０２４

①柴雷イオと ASUKA が“NXT”で合体、カイリ・セインは？　WWE と AEW、放送戦争勃発！
②WWE“サマースラム”。WWE 王座をマッキンタイア防衛！　ローマン・レインズが復帰！
③柴雷イオのムーンサルト・プレスの多用が、武藤敬司のヒザの蓄積の怪我のように気になる。

④ローマン・レインズの「ネタバラシ」について。
⑤中邑真輔の戦い方には、ナイフのようなものを感じる。最近の中邑について。
⑥KUSHIDA の、新日本プロレスで培われた技術はしっかりしている。
⑦中邑真輔は変わっているというより、まともな人物に見える。
⑧WWE のサンダードームのように、毎回同じ会場で興行をやるのも新しい形かもしれない。

５．AEW（オール・エリート・レスリング）。……０３３

①ランス・アーチャーは AEW に移籍して、更に人が変わった、恐ろしい！
②SCU（スコーピオ・スカイ＆フランキー・カザリアン＆クリストファー・ダニエルズ）とは？
③サニー・キスとジョーイ・ジャネーラは、これからの存在。
④AEW の女子戦線を追いかける。例えば、AEW 女子世界タッグ王座ができてもいい。
⑤エディ・キングストンとは、何者なのか？
⑥MJF、ダイヤモンド・リング選手権勝利。インナーサークル、スティング、ケニー・オメガ！

６．新日本プロレス。……０４０

①高橋ヒロムもフィン・ベイラーのように、アイコンがあれば体格に関係なく TOP に立てる！
②SHO の試合には、戦い、ガッツ、がある！
③新日本プロレスの、ジュニアを見てきて。（１９９９年～２０２０年）。

７．スターダム。……０４４

①ジュリア、ワンダー・オブ・スターダム王座戴冠！　舞華もフューチャー王者へ！
②柴雷イオの、スターダム時代の、団体の TOP 王座を持つ重荷。
③岩谷麻優は ROH にも参戦したが、柴雷イオやカイリ・セインの WWE と比べてどうか？
④岩谷麻優は、赤いベルト王者だが、本当に強いチャンピオンなのか？
⑤林下詩美の、赤いベルトへの挑戦権順番、余計な衝突を避ける。岩谷麻優の過酷防衛ロード。

８．WWE “NXT”。AEW “Dynamite”。スターダム『We are STARDOM！！』。……０５０

①“NXT”、柴雷イオ防衛。AEW、NWA 女子王座サンダー・ロサ奪えず。岩谷麻優、匠から防衛。
②AEW、志田光、王座防衛！　NXT、トニー・ストーム、ヒール転身！　ジュリアや舞華、防衛！
③“NXT”、柴雷イオとトニー・ストーム開戦の予感。AEW、志田光とアバドン。スターダム。
④WWE“NXT”、トニー・ストームの肉付きに惚れる。AEW、オメガのそっけないフィニッシュ。

９．他団体、レジェンド。……０５５

①武藤敬司の懐（ふところ）へ飛び込む、ノアの清宮海斗。８月 10 日横浜文化体育館決戦！
②蝶野正洋、STF（ステップオーバー・トーホールド・ウィズ・フェースロック）。セメント技！
③グレート・ムタは、アメリカマットでは、足四の字固めではなくアキレス腱固め、を使う。
④桜庭和志の UFC 殿堂入りもいいが、藤田和之が表彰されてもいい。
⑤RIZIN. 24 で、全日本の外国人プロレスラーのディラン・ジェイムス、また、噛ませ犬、役。
⑥藤波辰爾についての考察。ヘビー・ジュニアでも強い。息子の LEONA がプロレスラー宣言。
⑦２０００年～２００１年の、WCW（ワールド・チャンピオンシップ・レスリング）。
⑧ジョージ・トラゴス（ルー・テーズの師匠）の、「レスラーは骨を折らねばならぬ時がある」。
⑨オースチン　－　ホーガンは、１勝１敗で引き分け決着でも、実現して欲しかった。
⑩WWE は、WCW のあとに、K-1 と抗争しかけたのか？　K-1 の石井和義館長、WWE を挑発！

10．徒然。……０６６

①プロレスやスポーツが、エンターテインメント化されていく時代への嘆（なげ）き。
②プロレスで、足四の字固めがかけられない世代、STF やクロスフェースが主流か？

11. コラム。……０６９

①外道への「お前らの試合にはファイティングスピリットが見えない！」について。
②スイーツ真壁（刀義）は、世間では棚橋弘至やオカダ・カズチカよりも、知名度がある。
③棚橋弘至に、最終的に戻ってくれば、プロレスファンにとって一番心強い。
④鈴木みのるの、プロレスラー、格闘家は、お客に『ありがとう』以外で謝ってはいけない。
⑤プロレスに、ボクシングは、負けたままでいいのか？

⑥日本のアスリートは、日本のプロレスのほうが、アメリカンプロレスよりも好きな傾向。
⑦WWE や AEW で、私が、日本人選手を応援することについて。
⑧プロレスは、宝塚やミュージカルと同じ。でも、プラス戦いという面がある。
⑨内藤哲也がプロレス大賞、MVP&ベストバウトにみる、強すぎる一強の新日本プロレス！

12. 表彰。……０７９

①私の好きな歴代プロレスラー順、30 位ランキング！
②蝶野正洋、武藤敬司、カイリ・セイン。私の中の殿堂入りプロレスラー３人。
③好きなプロレスラーの試合もいいけど、存在が好き！　どんどん新たな選手に恋したい！

あとがきにかえて……０８３

１．アントニオ猪木。

２０２０年10月13日（火）

アントニオ猪木が大仁田厚を「『自分のことが弱い』と言っている奴とどう戦えばいい」。

　アントニオ猪木と言えば、「ストロングスタイル」と言われる戦い方で、“怒り”、“強さ”……などを全面に押し出していくスタイルのプロレスラーであった。新日本プロレスなどで活躍したが、今は引退している。

　大仁田厚と言えば、「邪道」と呼ばれて、「デスマッチの王」とも呼ばれる。「有刺鉄線電流爆破デスマッチ」など、今までなかったプロレスを開発して、インディー界では教祖とも呼ばれて、信者も多かった。

　猪木は強さを求めて、物凄いトレーニングをしてきたが、大仁田もジャイアント馬場の弟子として、全日本プロレス、「王道プロレス」で厳しい練習に耐えてきた。

　私からすると、それだけで、２人共尊敬してしまうのだが。

　猪木は、１９９９年から、新日本に参戦する大仁田のことを毛嫌いしていた。大仁田を対戦カードに組めば、チケットが売れるのだが、猪木自体が、大仁田の考えやファイトスタイルを端（はな）から嫌っていたようだ。

　大仁田は、新日本に初めて乗り込むと、「狙うは長州（力）の首、ただひとつ！」と吠えた。しかし、長州は１９９８年に既に引退していた。そして、新日本は大仁田に、まず佐々木健介と、次に蝶野正洋と、次にグレート・ムタ（武藤敬司の化身）（大仁田はグレート・ニタに変身）と、そして、猪木の介入もあったと噂されるが、6か月近く間を空けてついに、長州と大仁田が戦い、長州のサソリ固め～TKO（レフェリーストップ）で大仁田は敗れた。

　猪木が嫌うのは、目の肥えたファンに、「例え試合で勝利を収めても、その試合自体は負けたほうの選手のほうが勝っていたな、呑み込んでいたな、と思われること」である。大仁田は負ければ負ける程、輝くタイプのレスラーである。「強さなんて関係ない。弱くて何が悪い。ファンをこちらに惹きつけたらこっち（大仁田）の勝ちだ」というふうに戦う。

　話は変わるが、私からすると、アントニオ猪木は、強くて、かっこいい、憧れだけど、どう頑張ってもあんな風にはなれない。大仁田も、15 歳くらいから、全日本で過酷なトレーニングを乗り越えてきたと知って、弱いと言われるが、精神力などは相当強いではないか、と憧れてしまう。だから、私は、大仁田のようになることもできない。事実、猪木が大仁田を「『自分のことが弱い』と言っている奴とどう戦えばいい」。と何かの情報で知ったが、大仁田の口から「俺は弱い」という発言を聞いたかどうかもはっきりしない。「弱くて何が悪い」とか「負けて何が悪い」くらいのマイクパフォーマンスはあったかもしれないが。

　話は戻り、大仁田は長州戦のあと、大晦日の猪木の格闘技イベントに単身乗り込んで、猪木への挑戦状を持っていったが、試合は実現しなかった。猪木もここまでされるとさすがに飽きれたと思うが、大仁田は凄い執念だ。

　私は「自分が強いのか、弱いのかわからない」。でも人間は、そんなものではないか？　（終）

２０２０年10月14日（水）

アントニオ猪木の弟子が弱いと、猪木道場が弱いということになる。

アントニオ猪木自体が、真剣勝負の異種格闘技戦をたくさんおこない、勝っていったということは、猪木はプロレスラーとしても、ある種、格闘家としても強かったと言うことはできるだろう。しかし、猪木が作った道場、例えば、新日本プロレスの道場（今というより昔）や、猪木の作った他の道場の選手が、MMA（ミックスド・マーシャル・アーツ／総合格闘技）などのリングで負けたりすると、それは、その選手が弱いという見方もできるが、猪木道場が「そんなものか？」と思われたりして、猪木の名前に傷がつくことになるだろう。

トリプルＨのコーチは、キラー・コワルスキーだが、２０１８年４月のWWE（ワールド・レスリング・エンターテインメント）特番“レッスルマニア 34”では、男女混合タッグ戦で、トリプルＨと女子スーパースター、ロンダ・ラウジーが戦うシーンがあった。ロンダはUFC（アルティメット・ファイティング・チャンピオンシップ／MMA の団体）で王者になったことがある女子選手。さすがに体格は違ってトリプルＨが大きかったが、MMAルールでトリプルＨとロンダが対決したら、ロンダが勝つ可能性もあるのだろうか？　ロンダはMMAスタイルの戦い方で来るだろうが、トリプルＨは、コーチだったコワルスキーに教わったプロレスの関節技でロンダを負かせるのか？　別にトリプルＨの相手が女性のロンダではなく、UFC のヘビー級の男子選手でもいいが、プロレスの関節技が MMA マットで通用するのか？トリプルＨは負ければ、自分の価値も落ちるけど、コーチのコワルスキー道場の評価も落としてしまうかもしれない。

逆の角度から、ヒクソン・グレイシーの道場には、安生洋二が道場破りをしたことは有名だが、ヒクソンは安生の腕を極めるとかではなく、スリーパーホールドで落としたあと、マウントパンチで顔を血だらけにしたらしい。そして、安生が「別に大したことはなかった」などと言わないように、その映像を弟子にビデオカメラに映させた。それを日本から来た、マスコミ達に見せて、ヒクソンが安生の道場破りにも圧勝をした証拠にしたようだ。

『我が愛しの20世紀全日本プロレス史』（渕正信）参照。

柔道重量級の元日本チャンピオン岩釣兼生が馬場さんに（全日本の道場に）挑戦してきたのである。これも、まずは、馬場は岩釣を渕と５分戦わせたが、渕が有利に進めた。馬場は、次は10分と言うと、岩釣は「もういい、もうやめるよ！」と言う。しかし、馬場は「せっかくきたんだから」と言って、コシロ・バジリをリングに上げる。バジリが関節技を極めると、「参った！」と声を上げて岩釣はタップした。「あのまま帰ったら『俺は全日本に負けなかった。引き分けた』と言われるからな。完璧に勝って挑戦してきた奴にウムを言わせないこと。それが大事よ」と大熊さんが諭すように言う。（以上、部分的に引用）。

道場破りに関しては、私はやりたい人がやればいいと思う。でもかなり条件はきつくなりそうだ。繰り返すが、弟子は試合に敗れると、その師匠や道場は弱いと思われるだろう。（終）

２０２０年10月26日（月）

アントニオ猪木や飯伏幸太は、技を極めるのも、返すのも、パワーが大切だと言う。

　アントニオ猪木は、「小さい子供が、大人に関節技をしかけようとしても、かけることはできない。それは、子供には大人よりもパワーがないからだ」と語る。私は、これを読んで意外と「目から鱗（うろこ）」だった。

　私が、昔、柔術教室に通っていた時、腕ひしぎ逆十字固めを極める体勢に入ったが、相手の方は簡単にパワーで持ち上げると逆に、腕ひしぎ逆十字固めを仕掛けてきた。

　最近の新日本プロレスで言えば、飯伏幸太が、オカダ・カズチカの新必殺技、マネークリップ（変型コブラクラッチ）を返すにはどうすればいいか？　と考えた時、「パワーだ！」と思ったと言う。つまり、オカダから自分の首に巻き付いた腕を、パワーで持ち上げて外すという発想だ。飯伏は見事、その作戦が成功して、オカダから勝利を収めている。

　２００１年４月９日、大阪ドーム。IWGPヘビー級選手権、（王者）スコット・ノートン　ー（挑戦者）藤田和之の試合では、中盤、仰向けのノートンの左腕に、藤田が腕ひしぎ逆十字固めを仕掛けた。ノートンは元々、アームレスリング（腕相撲）の世界チャンピオンである。藤田は、このノートンの腕を極めて勝ったら凄いだろう、と思ったようだ。しかし、さすがノートンは腕を曲げて返してきた。しかし、その後すぐに、藤田はスリーパーホールドに仕留めて初のIWGPヘビー級王者になった。さすがに頸動脈（けいどうみゃく）は皆、鍛えられないから、これは、ノートンは逃れられなかった。

　ちなみに、藤田はかつてのミルコ・クロコップ戦でも、「アマレスの自分と、キックボクシングのミルコ。タックル　ー　キックの闘いを比べたかった」と発言しているように、自分と相手のどことどこを戦わせれば面白くなるのか？　ということを凄く考えて戦っていると思う。その辺は少しプロレスラー的な発想なのかもしれない。

　つまり、プロレスラーでも格闘家でも、一番大きいのはパワーだと結論付けたいところだが、そのノートンというパワーレスラーでも、キックボクシングのキックをまともに頭部に食らったらKOされるかもしれないし、ノートンは、藤田やドン・フライという選手よりもパワーはあるけど、スリーパーホールドに捕らえられると敗れてしまう。そんなにパワーがあってもボクシングやキックボクシングの相手と戦ったら、顔面へのパンチや、ボディーブローで、一発でやられてしまうかもしれない。

　猪木は、「子供が大人に関節技をかけられない、パワーがないから」とオフェンスの話をしたが、これは子供の成長とパワーと技術などをつければいいだろう。飯伏はオカダのマネークリップはパワーでディフェンスできる、という結論に至った。それだけではないだろうが、関節技のオフェンスとディフェンスでまず大切なのはパワーではないだろうか？　飯伏が言っているが、スリーパーホールドなどで頸動脈を締められても、パワーで返せるのか？　（終）

２０２０年11月５日（木）

アントニオ猪木の永久電池のビジネス。　いつかそうなる。猪木は時代より早すぎるだけ。

　アントニオ猪木は、プロレスラーのイメージが強いが、政治家もやり、さまざまなビジネスもおこなっている。
　これは確かかわからないのだが、ある国にタバスコという今で言えば、スパゲッティ（パスタ）などにかける調味料があった。それを日本に輸入して広めたのは、猪木のようだ。
　他にも、アントンハイセルという事業を立ち上げたようだが、そこで、永久電池というものを作っているという話を聞いた。その名の通り、永久電池とは、電池が永久に長持ちするもの。だから、極端なことを言えば、人が寿命なので死んだあとも、電池はずっと切れることがなく使えるという優れものだ。私は、昔、聴いたので、猪木の永久電池は失敗に終わったのかな？　と思っていた。それが成功か失敗かはわからないが、先日、家の中に人が来て「この蛍光灯、ずっと使い続けているんですけど、電池が切れないのが不思議なんですよ」と言ったら、その方は、「今は小学生の１年～６年まで蛍光灯がなくならないくらいの電池になっているのですよ」とおっしゃった。だから、猪木の目のつけていた永久電池まで行かなくても、いつかは時間の問題で永久電池になるだろうし、今の蛍光灯でさえ、６年は持つと聞いて、猪木は考えが、人より 10 年～20 年、早いのかもしれないと思った。事実、プロレスラーでも、そのように猪木のことを言う人は多いし。当たり前かもしれないが、猪木の言ったことは、まともなことなら、いつかはそうなるということだろう。それを口に出してビジネスにしようとしたということが、時間はズレていても凄いのだ。
　今、77 歳、喜寿を迎えた、猪木の夢・目標は、詳しい説明はできないが、ゴミに光（プラズマ）のようなものを当てるとゴミが消滅する、というビジネスに取り組んでいるようだ。モンゴルやフィリピンでは、ゴミは土に埋めれば消滅するものと勘違いしているらしい。だから、猪木は、まずは、日本のゴミをその光を当てる技術で、ゴミの埋め立て地を無くす計画を立てているのかもしれない。もし、それが成功すれば、世界中に広まる可能性がある。当然、モンゴルやフィリピンだけではなく、アジア、欧米、アフリカ……世界中に広まるかもしれない。猪木は、今は、この環境問題の夢を果たすことで生きられている感じがすると話している。だが、１つだけ気になるのは、「聞きに来い！」と言われそうだが（笑）、その光を当てるものが、誤って人間の身体に触れてしまったら、大怪我したりしないのかな？というイメージはある。ゴミに触れて消えるなら、人間の身体に触れても、身体が消滅したら一大事だ。しかし、そんなことを考えなくても、今、世界にはナイフもあれば、拳銃もある世の中だから、光を当てるものができて、人に向けた場合は、それなりの刑罰を受けることになるのかもしれない。そんなことを考えているのは、私くらいだろう（笑）。
　この発明も今はまだ実現されなくても、10～20 年、未来では、当たり前になっているのかもしれない。猪木が考えたことが、後年では実現されている事実が凄いと思う。（終）

２．プロレスと政治。

２０２０年7月16日（木）

プロレスを含め、人種差別問題について、考える。

　アメリカで白人の警察官が、黒人の方の首を絞めて殺したというニュースが、特にアメリカで問題になっているようだ。アスリートや、アーチスト（歌手など）が自分の意見を発表している。これは昔から続く、アメリカなどの白人が黒人を人種差別する行為なのだろう。
　では、逆はあるのか？　黒人が白人を殺して人種差別になる、という言い方はあまり聞かない。私が知らないだけで、そういうものもあるかもしれないが、いつも問題になるのは、白人が上の立場で、黒人が下の立場、というものが根付いている気がする。
　私は日本人で、アメリカ人に限らないが、余程自分と関係のないことに関しては、政治についても傍観者になると思う。自分に関わることになってようやく、日本の中でデモがあったら慣れないながら参加するかもしれないが、参加しないかもしれない。
　プロレスの話題では、かつて、力道山はアメリカに敗戦した日本に勇気を届ける為、カナダ人のシャープ兄弟（ベン＆マイク）や、アメリカ人はいたかはわからないが、外国人を相手に空手チョップで反撃して倒して、日本中の人々を喜ばせた。そういうアングル（シナリオ）でも、アメリカは日本に戦争で勝ったので、プロレスで負けても余裕なのだろう。
　力道山の時代からか？　もう少し後か？　わからないが、一方でアメリカのリングにマサ斎藤なども上がったようだが、アメリカのリングでは、基本的に今もだが、日本人はヒール（悪玉）を演じなくてはいけなかった。マサ斎藤は「ビール瓶が飛んでくるとか、アメリカ人の悪い客に囲まれることはしょっちゅうだったが、逆に全員殴り倒したよ！　（笑）」と言っていた。昔の日本のプロレスラーは、今より命がけの客の中での戦いだったのだろう。
　武藤敬司も、２０００年にWCW（ワールド・チャンピオンシップ・レスリング／WWE（ワールド・レスリング・エンターテインメント）に吸収された団体）に誘われて行ったものの、武藤いわく「ブッカー（興行主）のビンス・ルッソーって奴が、白人しか使わない人種差別主義者だったんだよ、だから、ほとんど使われなかった」と語っている。
　冒頭に書いた、白人警察官の黒人の方を殺した事件があった時くらいから、WWEを見ていると、元々、黒人のスーパースターズをWWEは使っていたが、最近では、MVP（モンテル・ボンタビアス・ポーター）がWWE・ユナイテッドステイツ王者。ストリート・プロフィッツ（アンジェロ・ドーキンス＆モンテス・フォード）がWWE・ロウ・タッグチーム王者。ニューデー（ビッグ E&コフィ・キングストン）が WWE・スマックダウン・タッグチーム王者。R-トゥルースがWWE・24／７王者。キース・リーがNXT王者＆NXT北米王者（NXTノースアメリカン王者）。など黒人選手の王者が多い。他にもボビー・ラシュリー、アポロ・クルーズ、シェルトン・ベンジャミン……などの黒人選手も登場する。例えば珍しくタッグ戦で４人とも黒人選手という試合もあった。これらは今回の事件へのWWEグループの表現なのか？
　日本はあまりデモなどがないが、私は無理に海外の真似をしなくてもいいと思う。（終）

２０２０年7月17日（金）

プロレスと、新型コロナウイルスについて。

新日本プロレスの棚橋弘至は以前、２０２０年２月から流行し続けている新型コロナウイルス（以下、コロナ）について、「今回のコロナはしぶといから長期戦になるだろう」と話していた。

アメリカのWWEや、AEW（オール・エリート・レスリング）は、アメリカ中で感染が広がっても、むしろ、「プロレスはアメリカ人にとって必要なものだから、放送を続けてくれ」、と国か政治家かファンかわからないが言われて、今、７月だがずっと放送を続けている。

日本では、国の方針にも従い、最初は無観客試合だったが、興行が中止となり、６月に新日本はようやく無観客試合ながら、放送をスタートさせた。

単純に考えても、アメリカであれ、日本であれ、プロレスは特にコンタクト（接触）のあるスポーツであり、それも上半身は裸の身体がぶつかり合うから、私は専門家ではないからわからないが、大丈夫なのか？　という気がする。

WWEでは以前、白血病で欠場していたローマン・レインズが、４月の“レッスルマニア36”でビル・ゴールドバーグとのWWEユニバーサル王座戦が組まれていたが、コロナ流行後、変更になり欠場。それからは大事をとったのかわからないが、今も欠場中である。サミ・ゼインは、以前は、中邑真輔とセザーロの３人で、スマックダウンで活動していたが、コロナに感染したようだ。WWEリングアナウンサーの女性ルネ・ヤングさんが感染して、AEWの夫のジョン・モクスリーはしばらく欠場していた（復帰したが）。私が意外とこうしてWWEの選手名鑑を眺めてみると、ほとんどの所属スーパースターズが出場の間隔はあるが、ちゃんと出場していることに気づいた。もっと出ていないかと思ったら、ちゃんと番組に出ている。

WWEも新しい選手を使って新陳代謝をおこなっているが、AEWからもどんどんと新しい選手が出てきている。コロナにより、トップクラスのレスラーに影響はないかと心配されたが、前述したモクスリーが復帰して、違う件でサミー・ゲバラが欠場している状態だ。

新日本や、女子プロレスのスターダムも活動を再開した。私の情報取集不足もあるだろうが、日本のレスラーで、コロナに感染したという情報を聞かない。それは、単に公表をあえてしていない場合もあるかもしれない。例え、コロナにかかった選手がいたとしても、私は特別な眼で見ることは決してないし、今、自分がたまたまかかっていないことに感謝するだけだ。まだ、戦いは終わっていない、気を抜く場合ではない。でも、考え過ぎると疲れてしまうから、コロナのことは適度の距離で思うのがいいだろう。

アメリカにはアメリカのプロレス継続や、日本には日本の中止から再開の発想があるが、やはり、テレビからであれ、お客さんが満員で、たくさん入っている光景のプロレスを見るのが楽しい。レスラーや関係者の体調が気になるが、コロナに負けないで欲しい！　（終）

２０２０年9月12日（土）

人種差別とリスト。WWE所属黒人選手が増える。

『地上最強の男 世界ヘビー級チャンピオン列伝』（百田尚樹／新潮社）参照。
この本はボクシングをテーマにした本だが、基本、白人と黒人の人種差別について書かれている。（以上、内容紹介）。
『Billboard TOP40』という、洋楽チャートでは、最近、白人の警官に、黒人男性が銃で撃たれて殺されたというニュースが話題になっている。
テニスの大坂なおみ選手は、黒いマスクで登場して、殺された黒人の方の名前を、１回戦から決勝まで、１人ずつマスクに記して登場して、抗議している。
深刻な内容なのに、プロレスでジョークにしてはいけないが、この１人ずつ記すリストには歴史がある。
WCWで、スコット・スタイナーが倒した相手をマイクで叫んだ。「スティング！　ブッカーT！　ゴールドバーグ！　シッド・ビシャス！　ケビン・ナッシュ！　DDP（ダイヤモンド・ダラス・ペイジ）！」これは、スコット・スタイナーの破壊者リストと呼ばれた。だが、人種差別とは全く関係はない。
WWEでは、クリス・ジェリコの「リスト・オブ・ジェリコ」（ジェリコのリスト）という物があった。このメモはジェリコがその後メモを公表したようだが、要するに、「気に入らない人物などをメモしていくリスト」で、これがWWEの相手との抗争につながったりするケースはあったが、人種差別とは全く関係はない。
WWF（ワールド・レスリング・フェデレーション／現、WWE）には、１９９６年～１９９８年頃に、ネーション・オブ・ドミネーションという、アフリカ系アメリカ人を中心に構成されたヒール（悪玉）ユニットがあったようだ。私は、まだ、この頃WWFを見ていなかった。メンバーはファルーク、クラッシュ、ディーロ・ブラウン、サビオ・ベガ、ザ・ゴッドファーザー、アーメッド・ジョンソン、ザ・ロック（現、ドゥエイン・ジョンソン）、マーク・ヘンリー、オーエン・ハート……他、といった面々で、白人のプロレスラーも数人入っていたようだ。この時代だからできたのかと思ったら、改めて最近のWWEでも黒人のユニットが復活している。あえてこういう時だからこそ、作っているのかもしれない。
そのユニットは、ハート・ビジネスと言い（MVP（モンテル・ボンタビアス・ポーター）、ボビー・ラシュリー、シェルトン・ベンジャミン、セドリック・アレクサンダー）の４人。先日は、この黒人の４人に対して、アポロ・クルーズ（黒人）、リコシェ（混血）、アイバー、エリック（２人は白人）の８人中６人が黒人の血をひくタッグマッチがあったが、何も違和感がなく、普通に見られた。WWEが積極的に黒人選手を使っているのは評価できる。
私は、日本人という種族にいるから気にならないが、人種差別はなくなって欲しい。（終）

２０２０年9月28日（月）

WWEの黒人選手中心ユニット、ハート・ビジネスがストーリーの中心で、団体を守る。

WWEの黒人選手ユニット、ハート・ビジネス、MVP（モンテル・ボンタビアス・ポーター）＆ボビー・ラシュリー＆シェルトン・ベンジャミン＆セドリック・アレクサンダー）の現４人ユニットがいる。最初はヒールユニットかと思われて、同じ黒人のアポロ・クルーズや、混血のリコシェ、バイキング・レイダーズの２人共白人のアイバー＆エリックなどと戦っていた。

しかし、“ロウ”の番組の中で「ロウ・アンダーグラウンド」というシェーン・マクマホンが作った「なんでもあり」の喧嘩ファイトのリングに登場すると、特にラシュリーなどは、MMAの経験などもあり強く、ハート・ビジネスの存在感を示した。

最近では、以前からWWEを潰しにかかる謎の軍団、黒装束のレトリビューションがやりたい放題やってリングを占拠したが、そこで、なんと意外にもハート・ビジネスの４人が大勢の大群レトリビューションと大乱闘を繰り広げた。

WWE のビンス・マクマホン会長は、かつてはアメリカとイラクが湾岸戦争を起こした時、イラクの大統領、サダム・フセインの友人というキャラクターで、サージェント・スローターにその役をやらせたようだ。戦争中だったのでだいぶ反感を買ったようだが（笑）。

私は、あまりビンスは黒人の差別をしない人だと思っている。だから、今回も、今、アメリカで黒人差別問題が起こったりしているので、言い方は悪いがそういうことを良い意味でビジネスに繋げようとしている気がする。ハート・ビジネスの黒人の４人がレトリビューションに立ち向かい、WWEを守るという構図は、まず、黒人の人からすれば嬉しい筋書きになるだろう。白人は、人によってどう感じるかまではわからないが、「黒人が黒人の活躍を喜んでいるのだから、それは普通に微笑ましい」と感じるとか、そこまで思わなくても「普通に良い光景だ」と思うだろう。あとは「俺には関係ない」と思う人がいるのかもしれない。

以前、テニスの大坂なおみ選手が、確か決勝まで約６枚の黒いマスクを、１試合ごとにマスクの面に、亡くなった（殺された）黒人の人の名前を書いて登場してくるということがあった。私は正直、こういうのは、あまり好きではない行為だと思って見ていたし、今後もあまりしてほしくないという気持ちはある。しかし、大坂選手が優勝すると、黒人のファンがカメラ越しに喜んでいるシーンが映っていた。だから、アメリカでは、日本にいる私にはわからないが、人種差別というものがまだまだ根強くあるのかもしれない。私がアメリカンプロレスや日本に出てくる外国人のプロレスを見ている限りでは、そういうものは長年見ているけど、あまり感じない。でも、メジャーリーグでは１回見たことはあるけど、それは、知っている人はいると思うので、あえて書かないが。

特に、黒人に対しての人種差別がなくなってくれるといいが、軽はずみには言えない。（終）

２０２０年11月７日（土）

プロレスと、ドナルド・トランプ大統領。大統領選挙投票結果は？　ジョー・バイデン氏か？

アメリカで、共和党のドナルド・トランプ大統領と、民主党のジョー・バイデン氏が、わずかな差でアメリカ大統領選挙投票を競い合っている。正直、私は、この競い合っていることは知っているが、特に政治家として何をやっているのかは、日本人の私はわからない。まったく関係ないが、イギリスの首相、ボリス・ジョンソン首相は顔が犬みたいでかわいいと思うのだが（笑）。キャラクター性がある。

キャラクターといえば、トランプ大統領はキャラクターがあると思うが、今までのアメリカの大統領で、なんといえばいいのかこんな派手（？）な大統領はいただろうか？

しかし私は、バイデン氏については、大統領になったら、何をやっていきたいのか？　というのが見えない。これは単に私の勉強不足だろう。

トランプ大統領で評価されているのは、一番はやはり雇用、働く場所をたくさん作ったというのがある。確かに、問題発言や問題行動も多いようだが、そういう点についてはあまり書きたいとは思わない。

私は、次期大統領が、トランプ大統領でも、バイデン氏でも、どちらでもいいと思っている。でも、ここ４年間トランプ大統領の政策は見られたから、４歳年上のバイデン氏が大統領を４年務めて、また、４年後トランプ大統領か、違う候補者にしても良いと思う。

トランプ氏（当時）は、元々は不動産王だから、かつて、プロレスのWWEに、“レッスルマニア”の大会などで、ビンス・マクマホン会長は会場（アリーナ）を借りたりしていた。

ある時は、トランプ氏とビンス会長が、代替の選手を戦わせて、負けたほうが坊主頭になるという試合で、トランプ氏が勝ち、ビンス会長は丸坊主になった。

私は株のことはわからないが、アングル（シナリオ）の中で、トランプ氏がビンスのWWEの株を、買い取るというようなこともしていたが、結局はビンス会長がトランプ氏に頼み込んで、それは避けることができた、というエピソードもあった。

『雨上がり決死隊のトーク番組アメトーーク！』では、４年前くらいにトランプ氏が大統領になった頃、お笑い芸人さんが、「トランプの話し方などは、すべてビンス会長が教えている」ということを言っていたが、私は、それは少し盛って作っているのではないか？　という気がしている。２人の話し方はそこまでは似ていない。

トランプ氏は、２０１３年に、マディソン・スクウェア・ガーデンの、WWEの殿堂式典で、殿堂入りした。インダクターはビンス会長が務めた。

私は、どちらの大統領が選ばれても、アメリカの国民が落ち着いて平和であって欲しい。不正・ズルがあるとか、そういう部分の政治的なやり取りは起こして欲しくないが、裁判とかそういうところまでいくとキリがない。私は、どちらの大統領になってもかまわない。(終)

２０２０年11月16日（月）

プロレスを、お客さんのいないところで、やる事について。（コロナ禍）。

『猪木力 不滅の闘魂』（アントニオ猪木／河出書房新社）。参照。

・もし今、俺が興行会社の社長だったら、イベントはやらないだろう。（中略）無観客試合という判断もあるけど、観客がいない会場でプロレスをやってもしょうがねえだろうと思う。

（以上、引用）。

アントニオ猪木は、ご自身がプロレスラーだった時の感覚で、観客がいない中で試合をしてもしょうがねえだろうと思ったのだろう。そして、今は、２０２０年の11月だが、前述したこの猪木の本の出版した時期は、まだコロナ禍が始まった時期での意見かもしれない。その中で、人の命を守ることを優先されたのだろう。

私は、アメリカのWWEと、AEWを見続けているが、私の知る限りアメリカではこの２つの団体は、コロナ禍に入っても、「アメリカ人にはプロレスは必要だ」ということが言われていたらしい。だから、選手がコロナにかかっていたケースもあったが、コロナ禍が始まる前から今まで、さまざまな工夫をしながら、ほぼ無観客試合だが、アメリカンプロレスは継続して続いている。

日本では、すぐに、日本中の全ての団体が興行中止に追い込まれた。女子プロレス団体、スターダムも最初は、無観客試合をしていたが、１回活動中止になった。その後、ドラゴンゲートがロールモデル的に動きだしたが、だんだんと、新日本プロレスやスターダムも、まずは無観客試合で興行を開始した。そして、徐々にお客さんを段階的に増やして入れたりして、大きな興行を打てるようになっている。

しかし、これはしょうがないことだが、特に、日本のプロレス団体のお客さんは「声を出してはいけない」というルールがあるようで、拍手を送ることしかできない。機械の効果音などを使って盛り上げているようだが。

WWEでは、最初はパフォーマンスセンターという場所でやっていたが、こじんまりとしていたので、サンダードームという場所になった。お客さん達の顔が、何枚もオンラインで客席に並べられて、おそらく声援なども機械でおこない、火薬・パイロンなども凄い。

AEWでは、ずっと同じ場所でおこなわれているが、リングサイドには、マスクしなくて大丈夫なのか？　と思うが、サブの選手などがリングを囲んでいる。最近は客席も少しばかり解放して興行をおこなっているようだ。

猪木が言うように、興行までなくなると、私としては拠り所がなくなってしまうが、やはりお客さんがいない、少ないプロレスは寂しい。また以前のように戻って欲しい。（終）

３．プロレスと教訓。

２０２０年9月29日（火）

野村克也の「手を抜かずに仕事をしていることを見てくれている人は、本当にいるのだ」。

『野村四緑 不惑の書 生涯現役の理念』（野村克也／セブン＆アイ出版）参照。

・営業上手な人間であれば、仕事を探すのに苦労しないのかもしれない。でも、わたしは自分を売り込むことなどできるタイプではなかったのである。
・そこで評論家である草柳大蔵先生にアドバイスを求めた。「見ている人はどこかで見てくれているものです。……」
・当時のヤクルトの相馬和夫球団社長がわたしを訪ねてきたときだった。「野村さんにはうちの監督になっていただきたいと思います」（中略）わたしの解説を聞き、そして評論を読んで、「この人なら」と評価してくれたのだった。
・手を抜かずに仕事をしていることを見てくれている人は、本当にいるのだ。（以上、引用）。

『アイディア・プロレスコラム DX』（岡本　悠／幻冬舎）参照。

・大谷は、ある番組で、「野球の神様はいて欲しい」と答えた。「自分がやってきた努力というものに絶対の後ろめたさがない選手（大谷のこと）を見つめていて、結果を現してくれる神様はいたらいいですね」（以上、引用）。

野村克也さんは、亡くなられたが、プロ野球選手や監督などで活躍した方である。大谷とは、大谷翔平選手のことであり、今、メジャーリーグで２刀流（投手とバッター）に挑戦して活躍する選手である。

私の話から始めさせていただくと、正直、こういうプロレスコラムという書く作業などを、野村さんが言うように、「手を抜かずに仕事をしているか」はわからない。でも、わからないなりに全力投球で記事を書いているつもりである。

前述した野村さんの最初の文に、「営業上手な人間であれば、仕事を探すのに苦労しないのかもしれない。……」という文があるが、私は自分が作った本でさえ、知り合いの方、数人には渡したが、売り込むということができないほどの人間である。自分は、気が弱いとか、プライドが高いとかは思わないが、とにかく売り込むような営業できる強いハートがない。

野村さんが言うように、「（隠れていても）、続けていれば、見ている人はどこかで見ているかもしれない」。大谷の言うように「努力を見つめていてくれて、結果を現してくれる神様がいたらいい」。時代はひきこもりの時代でもある、だから外に出て働けないタイプの性格の人は、家の中で何か継続して、夢を持てる人間になったらいいと思う。最初は誰も見ていないのだから意味がないと思うかもしれないが、継続していくうちに、それをやっていることが楽しい、という感覚になるかもしれない。会社を辞めた私がそうだ、お金は稼いでいないが、プロレスを見ることとプロレスコラムを書くことはずっと続けている。これをどこかで見ている人が救ってくれるとは思わないが、継続していれば何かに繋がるかも。（終）

２０２０年10月12日（月）

自信のある人間ほど、手当や待遇なども大きく出るのが通例。

『吉川英治全集・１１１⇒１冊 宮本武蔵 火の巻』（吉川英治）。参照。

赤壁八十馬：自信のある侍ほど手当や待遇なども大きく出るのが通例だからな、やせ我慢などせぬがいいのだ（以上、引用）。

今、特に海外のメジャーリーグや、サッカーなどでは、三桁の億円（例、３３３億円）などで契約するスター選手達がたくさんいる。日本でも５億円を貰うプロ野球選手などもいる。日本はわからないが、メジャーリーグや海外サッカーでは、代理人がついて交渉するからそういった駆け引きで凄い値段になるのかもしれない。

私は、ここ最近２度に渡り、プロレス本、第１弾と、第２弾を作った。第１弾は自費出版だが、本当に全国書店や、amazon、電子書籍、知り合いにもお金を払っていただき売った。第２弾は、続編というわけでもないのだが、製本のような形で、知り合いに無料で配った。第１弾で知り合いに買っていただく時も、お金を払ってもらうことが何か後ろめたいという気持ちもあった。だから、第２弾の時は、プロレスの内容もわからないのに買っていただくのは悪いと思って無料で配ったのだ。

私は、はっきり言って、自分に自信がない人間かもしれない。特に、例えば、自分の作品を作って、それをお金として貰うというようなことが苦手な気がする。

かつての、宮本武蔵や佐々木小次郎は、巌流島の決戦をしたことで有名だが、そういう武士のドラマなどを現代版として放送されているのを見ても、こういう侍は自分に自信があって、堂々としているのではないか？　と想像できる。（わからないが）。

自信という話はよくあるからいいだろうが、あるプロレスラーがいるとして、ブッカー（上司）に、こういう条件で試合に出場してくれ、と言われた時に、手当や待遇などを大きくできる選手は、ブッカーの言いなりにならないで、自分に自信がある選手だと思う。特にプロレスラーはポジションが上にいけばいくほど、発言力や条件も良くなるだろう。WWEのビンス・マクマホン会長に、ハルク・ホーガンや、“ストーンコールド”スティーブ・オースチン……などは条件をつけた可能性はある。最近のローマン・レインズは「ふて腐れたヒール」になったから、一番ビンス・マクマホン会長としては厄介な存在になったかもしれない。代理人にポール・ヘイメンもついた。でも、これは全部アングル（シナリオ）かもしれない。新日本プロレスでも鈴木みのるの本で、「条件をつけてくれ。こういうことと……あと弁当とお茶を（笑）」と言ったらしい。内藤哲也は「どうせ俺の考えは、会社は聞いてくれないでしょうけど」と言うが、１回、反抗した態度を取ってみたらどうだろうと思ってしまう、逆に条件をつけるとか。

話は戻るが、私は小心者として生きてもいいと思う。座っているノラ猫を脅かさないように道を避けてあげるほどだ。優しすぎるといえばそれまでだが、私はこのまま生きる。（終）

２０２０年10月12日（月）

武藤敬司はキレない男のお手本。プロレスで武藤のキレたシーンはすべてフェイク(嘘)！

『生涯現役という生き方』(武藤敬司＆蝶野正洋／KADOKAWA) 参照。(武藤の文)。
俺がキレてたかというと、全然キレてないよ。
狂気をコントロールできないとプロレスのトップには立てない。
プロレスの世界で俺はキレたことはないよ。これもホントだよ。(以上、引用)。
武藤は、単純にプロレスラーとしても、一般人（社会人）としても、穏やかで明るく、キレないから好かれるのではないだろうか。私は少なくとも武藤のその部分が好きだ。
あまり書くと息子さんに失礼なので、簡単に書くが、この本の中で、「息子が親のお金を勝手に使って、カブトムシを買ってきてしまった時だけは、息子を強く叱った」そうだ。そこは、武藤は父親として、ケジメがあってしっかりしていると尊敬できる。
この本で、私は、武藤はプロレスではキレたことがない。ということを知った上で、グレート・ムタ　ー　グレート・ニタの前の興行で、素顔の武藤が大仁田の毒霧を食らったらしいシーンをユーチューブで見たら、武藤が大声を上げて怒（いか）っていた。「あいつ、俺の触れてはいけないところに触れたぞ……」などと喋っていたが、私は、ある程度は武藤に詳しいつもりだったから、これは武藤がキレているように見せているのはフェイク（嘘）だろ！　と思った。武藤は普段試合終了後もマスコミに落ち着いて話すから、このギャップ（違い）が、私は面白かった。武藤は、これはキレてないでやっているのだな、と思った(笑)。
以前も nWo－JAPAN の BOSS として、試合後バックステージで大声を上げて、天山広吉や小島聡に八つ当たりして物を投げたこともあったけど、天山にぶつからない程度に投げて怒っていて、これも武藤はフェイクだと思った（笑)。
武藤の言っているのは、プロレスのリング、試合などに関係することがほとんどだと思うが、坂口征二が間をとって、新日本プロレスと UWF（ユニバーサル・レスリング・フェデレーション）が旅館で、合同で食事会をした時、UWF の前田日明と、新日本の武藤が、お酒の勢いもあって、武藤が前田に「UWF のプロレスはつまらないですよ！」と言ったことがあるらしい。そこで、前田と武藤が間に止められながらも、殴り合いになった、という話は聞いたことがある。もしかしたら武藤は怒りをコントロールしている中で殴り合いの喧嘩をしていたのかもしれない。もちろん、本気で殴り合った喧嘩の可能性もあるが、武藤はそこでもプロレス流を貫いた可能性もある。私は、武藤を買い被りすぎだろうか？
棚橋弘至やオカダ・カズチカ、内藤哲也なども、IWGP ヘビー級王者でトップに立ったが、武藤ほどではないかもしれないが、あまりプロレスの試合でキレたシーンは見ない。中邑真輔は新日本時代どうだったかな？　という程度だがコントロールはしていた気がする。クリス・ジェリコはオンとオフがはっきりして、試合でも、マスコミにも厳しかった。
武藤の、「プロレスの世界で俺はキレたことはないよ」は、冷静な男として鑑である。(終)

２０２０年12月12日（土）

“プロレスの力学”と、社会人や学校での、ポジションをまず把握すること。

『フミ・サイトーのアメリカン・プロレス講座』（斎藤文彦／電波社）参照。

試合をやっていないときのトリプルＨは、クリックによる“集中講義”のおかげで敵と味方の見分け方、勝つことと負けることのそれぞれの意味、話すべきタイミングと沈黙するべきタイミング、“プロレスの力学”のなんたるかを短期間で身につけてしまったのだった。

（以上、引用）。

私が、何かで知った話だが、まず、学校に入学したら、
１年目は、慣れる意味を込めて沈黙して回りの様子を伺う。
２年目は、友人を作る。
３年目は、自由に活動しろ。

というようなことを聞いた。

WWE、で勝手に例えるならば、
ビンス・マクマホン会長がどの位置にいて、
シェーン・マクマホン、ステファニー・マクマホン。
そして、トリプルＨはどこにいて、
ショーン・マイケルズやジ・アンダーテイカーはどのポジションにいるのか？
裏方陣も把握しなければいけない。
スーパースターズ（プロレスラー）も、ランディ・オートン、ブロック・レスナー、ポール・ヘイメン、ローマン・レインズ、セス・ロリンズ、ウィリアム・リーガル……などが、この団体のどの位置にいるか、まずは、沈黙して力関係を把握する必要があるだろう。

社会人や学校でも、まずは慣れることから始めるなら、沈黙で始めてもいい。
社会人や学校で誰が、発言力があるのか？　口が強いのか？　力を持っているのか？　ケンカが強いのか？　派閥はどうなっているのか？　などを例えば１年目という言い方がいいと思うが、それを把握したほうがいい。
学生の場合、友達は作っても、作らなくてもいいが、部活などに入れば友人はできやすい。しかし、先輩・後輩の上下関係が嫌ならば、無理に入る必要はない。しかし、社会人の場合、上下関係はしょうがない。とにかくまずは所属先の力関係を知ることが大事だろう。（終）

４．WWE（ワールド・レスリング・エンターテインメント）。

２０２０年7月２日（木）

柴雷イオとASUKAが“NXT”で合体、カイリ・セインは？　WWEとAEW、放送戦争勃発！

WWEの“NXT”の“グレート・アメリカン・バッシュ”の、２週間に分けて興行を行う番組の１日目のメインイベントで、NXT 女子王座戦、（王者）柴雷イオ　－　（挑戦者）サーシャ・バンクスがおこなわれた。サーシャ側のセコンドにはベイリーがいて、終盤介入しようとしたが、そこにイオと同じ日本人のASUKAが登場して、サーシャに毒霧を吐いた。そのチャンスにイオがサーシャにムーンサルト・プレスを決めて３カウント勝利。試合後、リング上でASUKAとイオがそれぞれのベルトを掲げてエンディングとなった。私の知る限りWWEの番組中に ASUKA とイオが合体して映る映像は初めてになる。これは共闘していくと見ていいのだろうか？　そして、ここ２～３週間くらいメインロースター（１軍）のリングに顔を見せていないカイリ・セインは、以前“NXT”で一時期イオ＆カイリでスカイパイレーツ（天空の海賊姫）として組んでいた。ASUKA＆カイリではカブキ・ウォリアーズとしてタッグを組んでいた。つまり、改めて書くと、ASUKA＆カイリ＆イオの３人はこれで２人ずつ関係していたことになるので、もしかしたら WWE グループはこの日本人３人組で売り出す手を考えているかもしれない。日本人なのにアメリカでは人気が高い３人なので、ベビーフェース（善玉）の軍団になる可能性もある。かつて、新日本プロレスのリングで、蝶野正洋が武藤敬司をnWo－JAPANに勧誘して入れるまで１年くらい引っ張ったという話もあった。さすがWWEグループもすぐには日本人を３人で組ませないで、日本のファンを焦らして、どこかで３人が共闘するという運びかもしれない。

同日の「ウェンズデー・ナイト・ウォー」とは、WWEの“NXT”と、AEWの“ダイナマイト”の、水曜日のテレビ戦争のことである。この２つの番組の時間が重なっている。AEWも“ファイターフェスト”の２週間に分けて行う興行番組の１日目が終わった。イオがいたので“NXT”も面白かったが、AEW もパイロンからの火薬や炎の演出などが派手で、フルショーでもあった為、AEW のほうが楽しめた。AEW の日本人女子プロレスラーには志田光がいて、AEW女子世界王座戦、（王者）光　－　（挑戦者）ペネロペ・フォードの試合は思わず光を応援していたが、必殺技、魂のTamashii、で勝利した。

今の流れだと、WWEがいくら億万長者といっても、あまり代わり映えしない毎週のパフォーマンスセンターの放送では、面白みがない。AEWは大富豪がやや開放感のある場所で、放送してくれる。やはりWWEは“ロウ”、“スマックダウン”、“NXT”、“特番”などがユーチューブで見ると、ハイライトになっていることが、衰退の原因だろう。私はフルショーで、レスリングを見たいのに、むしろストーリーラインのほうがメインになっている。AEWはこの日も２時間枠をフルショーのユーチューブで放送してくれた。だからこそ楽しめるのだ。このまま、WWEのハイライトが続けば、「ウェンズデー・ナイト・ウォー」はAEWが有利だ。WWEもAEWもあって欲しい。WWEは全番組、ユーチューブでフルショーにすべきだ！　（終）

２０２０年８月24日（月）

WWE“サマースラム”。WWE王座をマッキンタイア防衛！　ローマン・レインズが復帰！

WWEの夏の一大イベントと言えば、WWE特番“サマースラム”である。WWEでは先日の“スマックダウン”に続き、この“サマースラム”でも、サンダードームという、客席がバーチャル画像で並べられて観戦しているように見える技術の会場で放送をした。

私が、注目していたのは、WWE 選手権、（王者）ドリュー・マッキンタイア　ー　（挑戦者）ランディ・オートンの一戦だ。この試合は最近のWWEにしては珍しく、ちゃんとしたレスリングを展開してくれていた。だが、最後はマッキンタイアのクレイモア（キック）は交わされ、ごちゃごちゃしているうちにマッキンタイアがバックスライド（逆さ押さえ込み）で勝利して、王座を防衛した。私は、この結末は少し残念だった。相手がオートンという実力者だが、マッキンタイアはクレイモアで完全勝利を収めて欲しかった。しかし、番組中、来週の日曜日にWWE特番“ペイバック”をやると字幕が出たので、おそらくこのマッキンタイアとオートンの抗争は次回特番まで続くのではないだろうか？　その時はマッキンタイアの完全勝利が見たいが、オートンほどの選手が完璧に負けることは考えにくい。とにかくマッキンタイアの“サマースラム”での防衛を称えたいと思う。もちろん、オートンも応援しているのだが。

この日は、ASUKAは、第１試合で、ベイリーの持つWWE・スマックダウン女子王座に挑戦して、サーシャ・バンクスの介入もあり、ベイリーに丸め込まれて敗北した。

しかし、第５試合でも、サーシャの持つWWE・ロウ女子王座に挑戦して、ベイリーの介入を阻止すると、サーシャからASUKAロックで新王者になった。これは、おめでたいが、ベイリーはスマックダウン・女子王座をいつまで戴冠記録を伸ばすのかが気になる。

ちなみに、１日前のWWE、NXT特番“テイク・オーバー”では、NXT女子王者の柴雷イオが見事にダコタ・カイからムーンサルト・プレスで勝利して防衛した、これは嬉しい。

それから、NXT王者のキース・リーは、キャリオン・クロスに敗れて、クロスが新王者になったようだ。リーはNXT王座と、 NXT北米王座（NXTノースアメリカン王座）の２冠王だったが、NXT北米王座は以前返上していたが、意外と短命な王者で終わってしまった。

そして、元NFL（ナショナル・フットボール・リーグ）の、パット・マカフィーが、リング上から大勢の集団に向かってダイブした。WWEに入団はあるのか？

戻り、“サマースラム”では、WWEユニバーサル選手権、（王者）ブラウン・ストローマン　ー　（挑戦者）“フィーンド”ブレイ・ワイアットで、ワイアットがシスター・アビゲイルの連発で勝利して新王者になった。すると、試合後、このコロナウイルス感染の初期から欠場中だったローマン・レインズが登場して、場外のストローマンに攻撃すると、ワイアットにもスピアを決めた。レインズの復活となれば、WWEは多分もっと面白くなるだろう。（終）

２０２０年9月17日（木）

柴雷イオのムーンサルト・プレスの多用が、武藤敬司のヒザの蓄積の怪我のように気になる。

現、WWE所属の、柴雷イオは、日本の女子プロレス団体、スターダムの時代から、フィニッシュ技はムーンサルト・プレスである。

私は、WWEの“NXT”を見ていたのだが、イオがコーナーに上りムーンサルト・プレスを放ったが、イオのムーンサルト・プレスというのは、いわゆる弧（こ）を描くムーンサルト・プレスというより、相手に高速でぶつかりにいくラウンディング・ボディープレスのようなスタイルである。なので、この日の試合のように、これで３カウントは奪ったが、片足を強烈にマットに叩きつけたせいか、イオは勝者なのに少し座り込んでしまい、足を押さえて気にする仕草を見せていた。

例えば、武藤敬司は、長年のムーンサルト・プレスの使用から、足の手術をして、本当にムーンサルト・プレスを使うのは禁止になってしまった。武藤はヘビー級の体躯で、１８８cm、１１０kg あったから、その衝撃が全部ヒザにかかると相当のダメージになっていたのだろう。武藤もどちらかというと、ラウンディング・ボディープレスのようなスタイルでもあるし。

WWEでは殿堂者の、カート・アングルも必ず避けられて、交わされる、自爆式のムーンサルト・プレスを使っていた。カートの場合は、足にニーパッドをつけていたかは覚えていないが、フワッと空中に浮きあがって、プレスに行くスタイルだ。それでも相手に交わされるから毎回ヒザがマットに直撃すると思ったが、そんなに問題にしていないようだった。

武藤はヘビー級の体躯だったからヒザに問題ができてしまったのか？　イオは男子のジュニアヘビー級よりも小さい、１５６cm、５４kg という女子の体躯だからまだ大丈夫なのか？　ということが気になる。イオのヒザだって危ないかもしれない。

イオは30歳で、WWEでもNXT女子王者で活躍して、これから更に活躍が見込まれる女子スーパースターだけに、ここで武藤の例もあるから、ムーンサルト・プレスはやめて違う技をフィニッシュにしたほうがいいとは言いづらい。しかし、今後、イオがムーンサルト・プレスを使い続けるのは、ヒザに負担がかかる可能性がある。イオが今後、大好きなプロレスを何十年もやっていくのであれば、私は、ムーンサルト・プレスに変わる技をフィニッシュ技に開発したほうがいいと思う。ただし、イオのムーンサルト・プレスと並ぶか、超えるくらいのインパクトのある技がいいだろう。イオは今、数年したら辞めるかもしれないという覚悟ではプロレスをやらず、今のWWEに全てを捧げているだろう。だから、あと、数年の間だからムーンサルト・プレスを使おう、なんて甘い考えではやっていないと思う。イオの言葉を借りれば「そこで一生懸命やっている人達に、失礼にもほどがあります」だ。（笑）
イオにとってムーンサルト・プレスは、イオが飼うネコちゃんみたいに大切な宝物だと思う。だから、軽はずみには言えないが、武藤の例もあるので、新しい技も考えて欲しい。（終）

２０２０年9月26日（土）

ローマン・レインズの「ネタバラシ」について。

WWEの『This week in the WWE』を見ていたら、以前、パソコンのユーチューブで見ていた時にはわからなかった、WWEのローマン・レインズの「ネタバラシ」のカラクリがやっと見破ることができた。

まず、ビンス・マクマホン会長の部屋で、プロデューサーのアダム・ピアースが命令を受ける。ビンスは「特番、ペイバックのノー・ホールズ・バード戦（三つ巴形式の）で、契約書に３人の署名（サイン）が欲しい、全員からサインをもらえ」と伝える。

ピアースは最初に、WWEユニバーサル王者“フィーンド”ブレイ・ワイアットの素顔、ブレイ・ワイアットにサインを貰う。

次に、ブラウン・ストローマンにサインを貰う。

最後に、レインズの部屋を伺うが出てこないので、ピアースがノックして部屋に入ると、レインズは普通に出てきた。ピアースがサインを頼むと、レインズは「確認させてくれ」と言って、その日の“スマックダウン”のエンディングのシーンへ。

レインズは、「サインはしねえ」、「いくつか修正してほしい点がある」、「日曜のペイバックには出場する」、「三つ巴戦で全員ぶっ潰す」、「それも保証する」、「そして俺の王座を取り戻す」、「これは予言じゃねえ」「ネタバラシだ」。

と言うと、画面が動いて、レインズの横にはなんと、以前まで、ブロック・レスナーの代理人（エージェント）を務めていたポール・ヘイメンが座っていた。まさかの合体だったが、ヘイメンはピアースに「信じてくれたまえ」と声をかけて、その日の放送は終わった。

日曜日の特番“ペイバック”は、WWEユニバーサル選手権。まだ、3WAY戦ではない。ノー・ホールズ・バード（反則なし）戦。（王者）“フィーンド”ブレイ・ワイアット　ー　（挑戦者）ブラウン・ストローマン　ー　（挑戦者）現時点ではなし、だった。

実況は「レインズがいない」、「スーパープレックスでリングが崩壊」、この間にエントランス（入場ゲート）で、レインズがヘイメンと契約書にサイン。これで３WAY戦となり、レインズも試合に加わることが可能になった。つまり、このタイミングでサインをするために、レインズは「先日サインをせず」、「いくつか修正してほしい点がある」と言った。発言通り「日曜のペイバックには出場する」というのも果たした。そして、ストローマンからスピアで３カウントを奪ったので、「三つ巴戦で全員ぶっ潰す」、「それも保証する」、「そして俺の王座を取り戻す」という言葉も全て叶えて、WWEユニバーサル王者になった。実況は「大型犬（レインズのニックネーム）が復帰し、レインズ時代が到来した」と言った。

（感想）あと２つの言葉、「これは予言じゃねえ」「ネタバラシだ」は、明らかにWWEがエンターテインメントのプロレスを公表している会社じゃないとできないことだ。結局はレインズが勝ったことにより、「ネタバラシ」は完成して、WWEはまたしても凄かった！　（終）

２０２０年９月30日（水）

中邑真輔の戦い方には、ナイフのようなものを感じる。最近の中邑について。

中邑真輔は、WWEに所属している選手だが、AJスタイルズにしろ、ASUKAにしろ、誰にしろ……。特別、戦い方が変わったというスーパースターズは少ないと思う。中邑も変えているかもしれないが、WWEでの戦い方は基本的に変わった感じがしない。（これにはWWEの試合は、ユーチューブではハイライトでカットされて放送しているからというのも言えるのだが）。

あと、この日、もう１つ気づいた点は、中邑は今までは、長袖のコスチュームだったが、袖（そで）を切ったようなランニングシャツのようなコスチュームになり、私としてはこっちのほうがかっこいいと思った、でも自由にしてもらいたいが。

最近の中邑ということで言うと、以前、WWE・インターコンチネンタル（IC）王者だったが、ブラウン・ストローマンに敗れて奪われる。しかし、共闘路線で組んでいたサミ・ゼインがIC王者になるが、ゼインは欠場の為返上。周り回って、復活したゼインがIC王者を改めて巻いているという状態だ。中邑はゼインの他にセザーロとも組んでいたので、自然と中邑＆セザーロ組というコンビができる。中邑はシングルも強いが、タッグも結構強い。セザーロはかつてザ・バーというユニットでシェイマスと組んで、何度もタッグチーム王座に輝いているタッグのスペシャリスト。中邑は最近ではタッグ専門になってきている傾向もあるが、これもおそらく、まだ、ビンス・マクマホン会長がじっくり考えてのことだと思う。中邑のWWEでの成績は、WWE最高位王座（WWE王座、WWEユニバーサル王座）こそはないが、WWE・ユナイテッドステイツ（US）王座は２度。IC王座は１度。ロイヤルランブル優勝１回。NXT王座２回。WWE・スマックダウン・タッグチーム王座１回。

私は、素直に中邑には、両方の最高位王座を獲って欲しいが、慌てることはなくなった。順番に取っていくのかな？　という風に感じる。例えば、次は、ドラフトも近いけど、ロウに移籍したら、タッグでWWE・ロウ・タッグチーム王座のハードルを飛び越えるのか？　もし、ドラフトでスマックダウンのままなら、いよいよWWEユニバーサル王座も見えてくるのか？　でも、慌てない。やはり、武藤敬司も「アメリカでは、日本人はヒール（悪玉）じゃないと王者になれない。ベビーフェース（善玉）になってしまったら王者から４～５番のポジションに下がる」というようなことを言っていた。最近のWWEは中邑にしてもヒールの格好をしているけど、中邑ファンも多いから、ヒールに成り切れないというのはあるかもしれない。そして、英語のスピーチが難しいとなると、王者になるなら以前までのゼインや、最近のセザーロのようにマネージャーが就くだろう。短命の王者になる可能性もあるが、そればかりはよくわからない。（ASUKAはマネージャーをつけていないけど）。

なにより、私は、WWE特番“クラッシュ・オブ・チャンピオンズ”のキックオフで、中邑の試合をフルバージョンで見られてとても楽しかった。いつの日か最高位王者へ！　（終）

２０２０年10月22日（木）

KUSHIDAの、新日本プロレスで培われた技術はしっかりしている。

KUSHIDAは、高田道場で総合格闘技を練習して、ハッスルや、TAJIRIの作った団体のSMASHでも活躍した。その後はずっと新日本プロレスに所属して、ジュニアのエースに君臨すると、２０１９年にWWEに移籍した。

KUSHIDAの戦いの動きを見ていると、無駄がないという感じがする。プロレスセンスが抜群なイメージを受ける。もちろん、WWEもKUSHIDAの映像などを見て獲得した選手だと思うが、ここまでレスリングが完璧なレスラーも少ないと思う。私は、軽量級の“２０５・ライブ”とか、“NXT”でもクルーザー級王座などを狙うパターンかなと思ったが、最近はヘビー級の選手と闘うポジションまで来ている。極端に言えば中邑真輔を脅かすくらいの日本人になれるかもと言ったら言い過ぎだろうか？　確かにサイズはクルーザー級だから、大きい相手と戦うと、なかなか勝つのは難しいかもしれないが、私が言いたいのは繰り返しになるが、KUSHIDAのレスリングがしっかりとしていること。技を出したら、次のリスト（手首）を取って、次の技に移行したりしている。ハンドスプリング・エルボーなども返されることはあるが、２度目にはきちんと決めて、ハンドスプリングだけで相手を足で蹴って場外に落とすセンスもTAJIRI譲りで上手い。そして、私は、KUSHIDAのフィニッシュ技、ボバーボードロック（ダブル・リストロック、キムラロック、サクラバロックと同型）の、この技の入り方も上手く、日本時代を含めて、WWEの外国人選手達から、タップアウトを奪い続けている。だが、バック・トゥ・ザ・フューチャーは、封印した感があるなと感じる。

やはり、伊達に、新日本に所属していたわけではないと感じる。新日本はそれだけ、基本、応用……すべてが、きっちり教えられているのだろう。もちろん新日本にいても、実力や巧さがない選手もいると思うが、最近の海外では、中邑、KUSHIDAといった新日本にも長くいた選手は、レスリングが巧いという印象を受ける。「これだけ巧いのに、なぜ、上で使わないのか？」ということを実力で証明しているので、中邑もKUSHIDAも高いレベルのポジションに置かれているのだろう。24／７王座では、戸澤陽が自分のポジションを獲得しつつあるし、ASUKAや柴雷イオもかつての日本にいた頃の練習は間違いではなかったと証明している。

野球でも、日本人の選手がアメリカで育ち、メジャーリーグに行く例はまだないだろう。田澤純一投手のように社会人から直接メジャーに行って活躍したケースもあった。でも、ほとんどはプロ野球で数年実績を積んでから、メジャーへ挑戦するケースが一番成功率は高いかもしれない。サッカーで言えば久保建英選手はバルセロナの下部組織にいたが、まだ、確実な成功は収めていない。だから、プロレスにおいても、日本のプロレスを十分に経験した上で海外修行は別にして、大きな団体に移籍するのが成功への方法かもしれない。

話は逸れたが、KUSHADAはきちんとしたレスリングが出来るから、私は期待している。(終)

２０２０年12月12日（土）

中邑真輔は変わっているというより、まともな人物に見える。

WWEの“スマックダウン”に所属する中邑真輔。この日はセザーロと組んで、オーティス＆ショーティーGと戦ったが、最後は中邑のキンシャサが、ショーティーGに決まり、勝利した。

何か、中邑は髪を半分で結んでいるとか、“たぎり”パフォーマンスなどもあるせいか、変わった人という見方もあるようだ。

『ダウンタウン DX』という、お笑いコンビ、ダウンタウンが司会の番組にゲスト出演した時には、松本人志さんから「僕、この人（中邑）に最初会った時、『もう会うことはないな』と思いました（笑）」と言われていた。松本さんも多少はウケを狙い、多少まともに言ったと思うが、中邑は世間からは意外とそう見えているのかな？　と私は感じたりした。

でも、今日の試合も入場で「イヤァオ！」的に倒れ込んでいるパフォーマンスはあったが、コスチュームも、さすがWWE使用で、袖も切っているコスチュームにしていて、清潔でかっこいいというイメージがある。

先日、新日本プロレスのユニット、CHAOS（ケイオス）のDVDか何かの表紙に、学ランを着て、中邑と石井智宏がカメラを睨みつけている写真があったが、石井はまさに顔がいかつくて怖いが、中邑はそれとは違ってヤンキー系に「舐めんなよ！」というクシャクシャの顔をして味があり、面白かった。

私は、中邑は、昔のデビュー戦くらいからほとんど見てきたせいか、純粋に顔はハンサムだと思う。そして細部にこだわる服装のセンスや、入場曲の選曲、ついでに言えば、絵なども昔やっていたというから、センスがある。

中邑は、おそらく、日本で昔から見てきたファンには、真面目なイメージに映るかもしれないが、海外のファンなどは、「なんて変わった奴だ」というように捉えているかもしれない。日本のファンもそう思っているなら、私は少し遅れているのだろう。

過去にはたくさんのWWEへの挑戦者がいたが、最近では、日本の女子はASUKAが、男子は中邑が、日本選手のWWE挑戦の足掛かりになったと思う。
私の中では言い方は悪いが、中邑はまともだ。中邑自身がどう思っているのか？　（終）

２０２０年12月14日（月）

WWEのサンダードームのように、毎回同じ会場で興行をやるのも新しい形かもしれない。

プロレスの興行というのは、基本、アメリカでも日本でも、１か所ではなく、遠征して、国中を回っておこなうのが基本だ。
しかし、コロナ禍になり、日本はそれでも私の知る限り、新日本プロレスと、女子プロレス団体のスターダムは、国内中を回って、人数は制限しながらもお客さんを入れて興行をしている。

アメリカのWWEや、AEWは毎回１か所で開催している。WWEは以前、パフォーマンスセンターという場所で収録していたが、サンダードームというオンライン参加型の会場で毎回興行をするようになった。

素朴な疑問としては、プロレスはそもそも何故、自分のホーム会場を持たないで遠征をするのだろうということだ。
プロ野球なら、巨人は東京ドーム。サッカーのＪリーグならFC東京が味の素スタジアム。というホームがある。もちろん、他球団や地方球場に遠征する時もあるが。
例えば、新日本なら、「新日本ドーム」とか「ブシロードドーム」というプロレス専用のドームがあればいいが、かなりお金がかかりそうだ。でも、それをWWEやAEWはやっているのだから、新日本もできないことはない。

私は、意外に新日本は、どこを中心のリングにしているかはわからないが、スターダムなら後楽園ホールが中心となっているのだろうか？　昔のプロレスリング・ノアで言えば、ディファ有明を主戦場にしていた。

以前、新日本がブシロード体制になってからの、アニメ「タイガーマスクW」では、タイガーマスクWのライバルになる女性が仕切る団体は、ドームで本拠地を持っていて、ドームの外からは、今日の注目の対戦が、映像で紹介されていたと思う。

確かに、東京にドームを作りそこで集中的に興行をやるとなると、大阪、福岡、名古屋、北海道……などのファンが、自分達の土地で新日本を見られなくなってしまう。だから、WWEのサンダードームにしても、コロナ禍の間の対策であり、今はイメージしづらいがコロナ禍が完全終息すれば、WWEも遠征を改めて再開するかもしれない。
でも、自分達だけのホーム会場を持つという発想は、私の中では面白いと思うのだが。(終)

５．AEW（オール・エリート・レスリング)。

２０２０年9月８日（火）

ランス・アーチャーはAEWに移籍して、更に人が変わった、恐ろしい！

ランス・アーチャーは、TNA(トータル・ノンストップ・アクション／現・インパクト・レスリング)、WWE、全日本プロレス、新日本プロレス、プロレスリング・ノア、AEWの日米男子６大団体などで活躍した現役のプロレスラーである。今はAEW所属である。私は、リングネームは今のランス・アーチャーも好きだが、TNA時代のダラスというのもかっこよくて好きだ。

アーチャーは主にタッグチームとして活躍していたが、今を含め次第にシングルプレーヤーとして活躍するようになった。そのせいか、最近のAEWでは、レジェンドのジェイク・ロバーツをマネージャーにして、イキイキとした表情でファイトしている。

私は、以前１回だけ、新日本の東京ドーム大会でアーチャーの無名頃の試合を見たが、バイクでの登場で、ドームのイスに振動を浴びせ、凄い演出をしていた。アーチャーは身長が２０３ｃｍ、体重が１２０kgというスーパーヘビー級のレスラーである。

２０１１年～２０２０年１月までは、大将、鈴木みのるのユニット、鈴木軍のメンバーで新日本、ノア、新日本と活躍した。アーチャーはこの頃もタッグ屋であり、デイビーボーイ・スミス・ジュニアとは、新日本やノア、NWAなどで何回もタッグ王座のベルトを巻いた。

アーチャーは２０１９年10月、ジョン・モクスリーが返上して空位となった、IWGPユナイテッド・ステーツ・ヘビー級王座（IWGP USヘビー）のベルトを獲得した。だが、２０２０年１月４日、新日本の東京ドーム大会『WRESTLE KINGDOM 14 in 東京ドーム』の、テキサス・デスマッチで、(王者）ランス・アーチャー　－　（挑戦者）ジョン・モクスリーの、スーパーヘビー級２人がベストマッチをおこない、アーチャーは敗れて、モクスリーが新王者となった。アーチャーもデイビーボーイ・スミス・ジュニアも鈴木軍から離れて、それぞれ違う道を歩み始めることになった。

その後、アーチャーは、AEW に登場して、ジョバー（負け役）を相手に一方的な破壊的なファイトで強さを魅せつける。そして、AEWに新設されたTNT初代王者を懸けて、Codyと対決するが、Codyのクロスローズの前に敗れる。AEWではその後、アーチャーは格下のジョーイ・ジャネーラに喧嘩を売られ、試合をするが、必殺技のブラックアウトから、EBDクローで３カウントという、いつもの流れで勝利した。あとは、このままトップを狙わず、ジョバー退治のキャラクターを続けていくのかもしれないが、もったいない。しかし、愛嬌があり、ハンサムではないわけでもなく、顔もハツラツとしているが、プロモーターとしては確かに、トップで使うというよりも、トップとも戦うがそれには勝てないヒールというポジションだろうか？

相棒だったデイビーボーイ・スミス・ジュニアもインディーのトップで頑張っている。アーチャーもAEWでシングルベルトを獲得するなり暴れ回って欲しい。(終)

２０２０年9月22日（火）

SCU（スコーピオ・スカイ＆フランキー・カザリアン＆クリストファー・ダニエルズ）とは？

AEWの３人組ユニットのSCUといえば、スコーピオ・スカイ、フランキー・カザリアン、クリストファー・ダニエルズである。この３人の入場シーンでは、夜中のアメリカのハイウェイが映し出されて綺麗な光景だ。私は、基本、この３人をAEWで初めて知ったので、そんなに詳しいわけではないが、書き残しておきたい３人なので、３人をそれぞれ、紹介する形をとる。

・スコーピオ・スカイ

年齢は37歳と油に乗ったプロレスラーだ。カザリアンと共に、初代AEW世界タッグ王座にも輝いている。『個』の能力も高く、第２代AEW世界王者のジョン・モクスリーと記者会見上で乱闘騒ぎを起こす煽りVTRも流されていた。初代AEW・TNT王者のCodyにも突然、対戦を表明した。しかし、モクスリー戦も、Cody戦も、結局、繋ぎ役として使われてしまい敗退に終わった。スコーピオは、１７８cm、93kg と体格としてはクルーザー級とも言えるので、空中技、レスリングセンス、そして必殺技のTKOなどを駆使して、シングルでも結果を残したいところだ。

・フランキー・カザリアン

年齢は43歳。１８５cm、98ｋｇと体格としては、ヘビー級と言える。前述した通り、初代AEW世界タッグ王座にも輝いている。アルメニア系アメリカ人ということだが、顔は男前でかっこいい。四角いような顔をしている。最近は、ダニエルズと組んだり、AEW～ダーク～の番組では、若手相手にシングルマッチを戦ったりしている。WWEやTNAや、新日本プロレスにも参戦していた。AEWは最近、タッグチームが充実してきたので、まだ埋もれないで欲しい。

・クリストファー・ダニエルズ

私だけではないと思うが、SCU の中で一番有名なのは、このダニエルズではないだろうか？　カレーマンという覆面レスラーで日本のあらゆる団体で活躍して、新日本のリングにも上がっていた。年齢はなんと50歳である。私はダニエルズが入場の際にマイクスタンドを持って、フレアーウォークとも違うが、独特のテンポで歩くスタイルが好きである。１８３ｃｍ、１０２kgのヘビー級。（昔はジュニアでも戦っていたが）。50歳ということもありかなりの戦歴とタイトルを持つが、このAEWでは、SCUの仲間のスコーピオ＆カザリアンが初代AEW世界タッグ王座に輝いているが、ダニエルズはまだタイトルの獲得はない。私はこの３選手の中では、ダニエルズが一番のお気に入りである。

（感想）SCUの３人を形容するのにいい言葉は「かっこ良い」だろう。スコーピオはシングルで行けるし、カザリアンとダニエルズもタッグで行ける。マイクでも盛り上げる。（終）

２０２０年9月26日（土）

サニー・キスとジョーイ・ジャネーラは、これからの存在。

AEWの、サニー・キス、26歳。“コンクリート・ローズ”と呼ばれる。ジョーイ・ジャネーラ、31歳（男性）。“バッド・ボーイ”と呼ばれる。

このタッグが最近はアベレージ（平均）より少し上の良い成績をタッグで残している。

サニーは女性の心を持つが身体は男性、という性だろう。だから、私は、サニーの性別をどちらで呼べばいいかわからない、慎重な話だ。だが、電子辞書で調べると「男色。男らしくない男性、女装した男性、男性同性愛者などの俗称」とあるので一応、男性ということになるのだろう。

ジョーイ・ジャネーラについては、ほとんど私はわからない。しかし、WWEや新日本プロレスのような、大きい団体に参戦や所属した経験がないというところを見ると、自由を愛するプロレスラーか、実力自体がそんなにないという可能性もある。

サニーはダンスを得意としていて、私はレスラーが、バックダンサーと一緒に踊りながら入場してくるのは、ボブ・サップ以来見たことはなかった。サニーは以前１回ダンスをしながら入場してきたが、ダンスはバックダンサーとピッタリ息が合って完璧だった。サニーはよくお尻（ケツ）を小刻みにプルプル震わせるムーブをするが、それを見て、解説のタズが「ガハハハハハ！」と笑っているシーンがよくある。サニーは非常に真面目で、真剣だからこそ、ケツを振っているところにケリなどを食らうと、タズが笑うシーンがある。

ジャネーラは、急にトップクラスの選手に絡むことがある。以前は、クリス・ジェリコに突然、再三食いついたが、ジェリコのウォールズ・オブ・ジェリコで、タップアウトで敗れている。基本的には、ライバルはジミー・ハボック、サミー・ゲバラ、ダービー・アリン、キップ・セイビアンといった辺りになるのかもしれない。

サニーは得意技に、武藤敬司が使っていた、スペース・ローリング・エルボーを使う（ちなみにペネロペ・フォードも使う）。しかし、サニーの場合はエルボーではなく止まって、ビンタ（張り手）をする。それから、サニーは足を大相撲の力士のように開脚することができるのだが（そういえば、これもペネロペはできる、共通点２つ目）。サニーはフィニッシュでトップコーナーから開脚でプレスして３カウントを取る技を使う。私はこれを勝手に開脚プレスと呼んでいる。例えるならムーンサルト・プレスと呼ぶように。

最近のジャネーラとサニーはタッグを組み、２番組に連続出場。“ダーク”では、サニーが開脚プレスで３カウント勝利を収めた。しかし“ダイナマイト”では、WWEからAEWに移籍した“ザ・ベスト・マン”ミロ（元、ルセフ）が、アコレード（キャメルクラッチ）でサニーからギブアップ勝ち。サニー＆ジャネーラは敗北。

ジャネーラには向上心があり、サニーにはスター性もあるから、今後に期待大だ。（終）

２０２０年９月30日（水）

AEWの女子戦線を追いかける。例えば、AEW女子世界タッグ王座ができてもいい。

AEWの女子戦線は、例えば、WWEと比べると、実力・人数共に、まだ強さが足りないだろうし、選手数も足りないかもしれない。

AEWの、初代AEW女子世界王者は、里歩。第２代は、ナイラ・ローズ。第３代、現王者は、志田光である。里歩は日本の女子プロレス団体、スターダムのハイスピード選手権に登場したりしたが、なぜかAEWには登場しなくなってしまった。

先日、AEW特番“ALL OUT２０２０”で、AEW女子世界王者の光と、NWA（ナショナル・レスリング・アライアンス）世界女子王者の試合がおこなわれた。人によってはどうでもいいことかもしれないが、AEW女子世界王者と、NWA世界女子王者ということで、２つのベルトの女子と世界の並び方が違っている。NWAは伝統もあるから、昔は、NWA世界女子王者と世界を先頭にしていたのだな、と感じた。AEWは現代的で、AEW女子世界王者と女子を先頭にして尊重したのだなと感じた。しかし、この試合は、AEW 女子世界選手権、（王者）志田光　－　（挑戦者）サンダー・ロサということで、光のタイトルだけが懸けられて、ロサのベルトは懸けられなかった。試合は光が「Tamashii～片エビ固め」で勝利、防衛した。

以前、AEW女子タッグチームカップもおこなわれて、決勝でナイトメア・シスターズ（ブランディ・ローデス＆アリー）　－　イヴァリース＆ディアマンテが戦い、イヴァリース＆ディアマンテが優勝した。実力ではブランディは強いが、アリーの実力が並程度で、チームワークも良くなかった。イヴァリース＆ディアマンテのほうが、チームワークが良かった。

名前を挙げてみても、準決勝に進出したのは、ビッグ・スウォール＆LiL スウォールや、タイ・コンティ＆アンナ・ジェイ。１回戦では、ラーチェ・シャネル＆レバ・ベイツや、ダシャ＆レイチェル・エラリング、ナイラ＆アリアナ・アンドリュー、ペネロペ・フォード＆メル。などが参戦した。

他の女子選手は、アバドン、クリス・スタットランダー、サンダー、光、ブリット・ベイカー。という面々で、シングルプレーヤーをタッグにも参戦させれば、大きくできるかもしれないが、今のこのメンバーだけで、AEW世界タッグ女子王座を作るのは、ぎりぎりどうかな？　という気もする。でも、イヴァリース＆ディアマンテのようなかっこいいタッグチームがタッグ王座を持つのならば、それはとてもいいことかもしれない。前回はこのイヴァリース＆ディアマンテ　－　志田光＆サンダー・ロサの、タッグチームカップ王者　－　シングル王者（AEW女子世界王者＆NWA世界女子王者）の２人が対決して、光の「Tamashii～片エビ固め」で、光＆サンダーが勝利を収めた。こういう形ならばAEWの女子タッグ戦線も盛り上がっていくのではないだろうか？

でも、まずは、AEWの女子部門が全体的にもっと実力・人数共に向上することだろう。(終)

２０２０年10月23日（金）

エディ・キングストンとは、何者なのか？

AEW特番“フル・ギアー”で、AEW世界王者、ジョン・モクスリーに挑戦することが決まっている、エディ・キングストン。

キングストンは、２０２０年７月からAEWに参戦すると、＜ルチャ・ブラザーズ＞（レイ・フェニックス＆ペンタゴンJR）と、ザ・ブッチャー＆ザ・ブレードのタッグの４人のまとめ役のような存在になったが、いつも何かを企んでカメラ目線を送ったりしていた。

個人としては、“ダーク”の第５試合で、ジョバー（負け役）リー・ジョンソンをバックフィスト・トゥ・ザ・フューチャー（裏拳）で破る。

続いていきなり、“ダーク”のメインイベントに登場すると、ブライアン・ピルマンJRを、バックフィスト・トゥ・ザ・フューチャーで破る。

そして、なぜ、そんなにすぐに待遇が良かったのかわからないが、翌日の“ダイナマイト”のメインイベントに登場して、AEW 世界選手権、（王者）○ジョン・モクスリー　－　●エディ・キングストンで、サイドスリーパーホールド～レフェリーストップ、モクスリーの防衛、でキングストンは敗れている。

その後、キングストンは、“ダーク”の第９試合で、ムバドゥからキムラロック～タップアウトを奪い勝利。

そして、後日の“ダイナマイト”のメインイベントに勝利したモクスリーに、キングストンはルチャ・ブラザーズを盾に襲い掛かり、仕返しとばかりにスリーパーホールドでがっちりと締め落とした。レフェリーの人員が４人程止めに入ったが、ルチャ・ブラザーズがガードしているから、誰も救出できなかった。落としたモクスリーに向けて、キングストンはやや本気モードで、かなりマイクでがなり立てた。ルチャ・ブラザーズのレイ・フェニックスが「そろそろ、いいのではないか？」とマスク越しにキングストンを落ち着かせようとしているようにも見えた。

この、キングストンをボスにしたユニットには、ナイトメア・シスターズにいた女性のアリーも加わり、バニーと名前を変えていた。解説席に座るなど、普通の面もあるキングストンだが、私は、昔のキングストンを知らないのでどういう選手かわからないが、ほとんど、レスラー的に笑いもしないし、常に、真面目な表情で怒っているシーンが多い。

私が、一番危惧するのは、キングストンは、今度のAEW特番“フル・ギアー”でも、AEW世界選手権でシュート（真剣勝負）を仕掛けて、特に、前回やられたスリーパーホールドや、自分も得意とするキムラロックなどで勝って王座を奪いに行くのではないかと心配される。私は、好きではないけど、そういうレスラーが本当にいるなら、“フル・ギアー”で本当にキングストンが勝っちゃったらモクスリーだけでなく、AEW首脳陣はどう対応するかが気になる。もしかしたらAEWのリングで、シュートマッチがあり得ると少しワクワクする。（終）

２０２０年12月10日（木）

MJF、ダイヤモンド・リング選手権勝利。インナーサークル、スティング、ケニー・オメガ！

AEW“ダイナマイト”この日も結構いっぱいニュースがあった。

番組序盤、先週のAEW、ダイナマイト特番の“ウィンター・イズ・カミング”で登場した、スティングがこの日も登場した。リング上にはアーン・アンダーソン、トニー・シバーニ、コーディ・ローデス、客席にAEW・TNT王者のダービー・アリンもいた。
スティングがリングに入ると、アンダーソンは何かを喋ってリングから出た、でも温かいことのようだった。すると、スティングとシバーニは懐かしさからか抱擁するシーンも見られて軽くマイクで話して、シバーニもリングから出た。スティングはコーディとマイクで話したが、アリンにも話を振って、良い感じでバックステージに下がっていったように見えるが、スティングがコーディやアリンを含め、戦うことがあるのか？　あくまで裏方やセコンドのような役目なのかに注目だ。

ケニー・オメガは、先日、AEW世界王座になったあと、インパクト・レスリングに逃走して、ベルトを持ち逃げした。しかし、この日はヘリコプターから堂々とAEWの会場に到着すると、入場テーマ曲と映像が流れて、“クリーナー”らしく４人の箒（ほうき）を持って踊る女性の中、リングに謎の男と共に現れた。英語でわからなかったが、私はオメガがまだ何をしたいのかわからない。この日、ジョン・モクスリーは登場しなかった。

クリス・ジェリコ率いる、ヒール（悪玉）ユニット、インナーサークルは、MJF（マックスウェル・ジェイコブ・フリードマン）とワードローが加わり拡大した。しかし、この日は、MJFとサミー・ゲバラがギクシャクしていたが、なんとか握手をして繋いだ。ジェイク・ヘイガーとワードローも少し言い合ったが、ジェリコが「コンティニュー！　（継続する）」と言ってまとめた。最後は、全員で中央に向かって中指を立てるサインポーズで、締めた。

メインイベントでは、AEW・ダイヤモンド・リング選手権。と言ったらいいだろうが、単に指輪を獲得できる試合がおこなわれた。MJF －　オレンジ・キャシディの試合だったが、MJFサイドにはインナーサークルの面々がついた。キャシディにはベストフレンズの２人や、ベビーフェースの若手がキャシディ側に陣取った。最後は、セコンド陣が大乱闘状態になったが、ミロがエントランスからキップ・セイビアンと共に現れて、ミロがキャシディにクローズラインを浴びせたので、MJFがキャシディをカバーして３カウント勝利。ベストフレンズとミロの遺恨が再燃した。MJF はダイヤモンド・リングを取り戻した形となった。（終）

６．新日本プロレス。

２０２０年7月３日（金）

高橋ヒロムもフィン・ベイラーのように、アイコンがあれば体格に関係なく TOP に立てる！

フィン・ベイラー（元、プリンス・デヴィット）は、WWE ではクルーザー級だが、ヘビー級と関係なく戦っている。新日本プロレス時代はジュニアヘビー級だった。

日本でも、ベイラーはカリスマ性（私は、アイコンとも呼ぶ）があるので、サイズが小さくてもオーラのような雰囲気を醸し出していた。

そして、WWE に移籍してからは、WWE ユニバーサル王座の初代王者になるとか、NXT 王者にも輝いた。

WWE は比較的、クルーザー級のスーパースターでもヘビー級と戦うことはあるが、そこでベイラーはヘビー級が関わる最高位王座を獲得するのだからこれは凄い。おそらくベイラーはアメリカのゴールデンタイムで王座戦にしろ、普通の試合にしろ、出ているのだから、新日本の高橋ヒロムが言う、「ゴールデンタイムのメインイベントで、ジュニアヘビー級の選手として IWGP ヘビー級のベルトに挑戦する」。という夢は、WWE と新日本の違いはあっても、ベイラーはアメリカで実現していると言える。

ヒロムが必要なものは、ベイラーや、レイ・ミステリオ、引退したが獣神サンダー・ライガー……などが持つ、高いアイコンだ。パッと見ただけで、ファンが吸い込まれてしまうような雰囲気。

WWE ではベイラーや、ミステリオがヘビー級と戦っても、何も違和感がない。新日本ではライガーもあまりヘビー級のレスラーとはシングルマッチでは戦っていないと思う、特に IWGP ヘビー級王座戦などは２試合だけだった。WWE のように、新日本も、もっと遠慮なくヘビー級とジュニアヘビー級の選手の、シングルマッチやタイトルマッチが増えていくといい。ウィル・オスプレイや鷹木信悟がヘビー級に転向したが、新日本も WWE みたいに、ヘビー級とジュニアヘビー級の壁を壊して、ジュニアヘビー級のベルトは、もう少し下のランクのレスラーがつけるようなベルトになっていくのがいいかもしれない。

かつては、WWE では、クリス・ベンワー、クリス・ジェリコ、エディ・ゲレロ……などといったスーパースターが体格はクルーザー級ながら、徐々に身体も大きくして、ヘビー級として最高位王座のベルトを巻いた例もある。

ヒロムに必要なのは、選手、ファン、誰からも「あいつは凄い！」と言われる選手になることだが、ヒロム本人の頑張りと、新日本のプッシュで、今はかなりのチャンスを得ている。ヒロムの夢で「ゴールデンタイムのメインイベントで、ジュニアヘビー級の選手として IWGP ヘビー級のベルトに挑戦する」と豪語する。

ブシロードの木谷高明会長のさじ加減によっては、ゴールデンタイムはともかく、それは可能かもしれない。アイコンは実力もそうだが天性のものだ。ヒロムには期待大だ！　（終）

２０２０年９月５日（土）

SHOの試合には、戦い、ガッツ、がある！

先日の『ワールドプロレスリング』の番組としての主役は、新日本プロレスで初めて王座ベルトを巻いたYOSHI-HASHIだった。NEVER無差別級６人タッグマッチのトーナメント決勝で、石井智宏＆後藤洋央紀＆YOSHI-HASHI － オカダ・カズチカ＆矢野通＆SHOのユニット、CHAOS（ケイオス６人）対決が実現して、最後は、石井がSHOを垂直落下式ブレーンバスターで沈めて、石井組が新王者になった。だが、私に響いてきたのはYOSHI-HASHIのベルト初戴冠でもマイクアピールでもなく、SHOのファイトにあった。

SHOはこの試合でも、以前のNEVER無差別級王座王者の鷹木信悟との試合でも、ラリアットを中心とした真っ向勝負を挑む傾向にある。しかし、SHOは身長が１７３㎝、体重が93kgとジュニアヘビー級の体格なので、どうしても、石井や鷹木といった相手と真っ向勝負で戦うと体躯的にやられてしまう面がある。

今後、SHOをヘビー級で活かすには、体重を増やすしか手はないと思うが、顔もハンサムなので、スター性は十分にあると思う。

SHOは今までYOHとジュニアで「スーパージュニアタッグリーグ」を３連覇しているが、私は、もうジュニアには出ない覚悟も必要だと思う。ヘビー級で戦って、トップを目指すというのがいいだろう。

でも、矛盾するようだが、この新日本プロレスに限らないが、特に日本のマットで、ラリアットを中心としたレスリングで相手を破っていくのは難しい。だから、SHOはラリアットを使うプロレスは否定しないが、できるだけやめて、途中、石井との攻防では腕ひしぎ逆十字固めで追い詰めていたような攻めがカギになると思う。

必殺技のショックアロー（変型パッケージドライバー）も、石井ほどの相手になってくると重さでディフェンスされて、返されてしまう。ヘビー級対策で新しい技の開発も必須となってくるだろう。

あとは、リングネームをこのままSHOにするかだ。今まではYOHと組んでいたので、ROPPONGI3Kとしてやってきた。WWEで言うならば、ザ・ロッカーズ、ショーン・マイケルズとマーティ・ジャネッティのタッグコンビのように、マイケルズのプッシュがSHOというイメージで、タッグを解消するのも、私はYOHに酷いことを言っているかもしれないが、１つの選択肢だと思う。プロレスラーとして這い上がる為には、ヘビーでトップを獲るというのが、やはりかっこいい。SHOは今更、田中翔（北海道日本ハムファイターズの中田翔選手にも似ているし）に戻さないほうがいいと思うし、これは、SHOのリングネームでもいいが、大物の名前には、少しだけピンと来ない。

この日は、YOSHI-HASHIがベルト初戴冠で主役となったのはおめでたいが、SHOが勝っていてもヘビー級のタイトルは初戴冠だったわけだ。SHOのヘビー級侵略に期待大！　（終）

２０２０年10月25日（日）

新日本プロレスの、ジュニアを見てきて。（１９９９年～２０２０年）。

私が、新日本プロレスを見てきた、１９９９年～２０２０年までを振り返ると、まず、獣神サンダー・ライガー、エル・サムライ、ケンドー・カシンという存在のイメージが強い。そして、トンガリコーンズの金本浩二、大谷晋二郎、高岩竜一。この６人ということになるだろう。

順番はそんなに憶えていないが、バトラーツから田中稔が入り、金本と稔のジュニア・スターズという２人組のタッグチームも結成した。２人共、ハンサムで人気があったが、最初は金本が怪我明けから TEAM２０００入りしたため別行動。しかし、２回目に組んだ時は、稔が金本を裏切り、解散した。

その後、リングスから成瀬昌由が新日本に移籍して、いきなり稔を、必殺技クレイジー・サイクロンで破り、IWGP ジュニアヘビー級王者に輝いた。成瀬は「ヘビーもジュニアも外敵軍にベルトを獲られて、新日本は大丈夫ですか？」と言ったが、２度目の防衛戦で、カシンが素顔の石沢常光の姿で登場して、瞬殺して勝利した。でも、成瀬は他では、ハッスルが新日本に登場した際、小川直也などがハッスルポーズをしようとしたが、神聖な新日本のリングではさせないとばかりに、一番前で抵抗した。

そして、邪道、外道も新日本プロレス入りを決めた。私の記憶では、邪道と外道はずっといるのに入らないのかな。と思っていたが、ある時、急に外道がマイクを持ち、大声で宣戦布告すると、新日本ファンはヒールの２人にブーイングを浴びせた。この時点で入団して、今も新日本で重要な役割りにいるのは凄い。

しばらく、私は、新日本のテレビを見られない生活を送っていたので、ジュニアの記憶は、２０１１年、２０１２年、２０１６年～２０２０年といった辺りになると思う。テレビではジュニアかはわからないが、TAJIRI が登場して、花束か何かを、実況席に投げつけたら、解説席の山崎一夫さんに当たってしまい、試合中に山崎さんに TAJIRI が追いかけられるというシーンがあった。（あれはガチではないか？　笑）。ジュニアの顔ぶれも田口隆祐、（４代目）タイガーマスク、KUSHIDA（現、WWE 所属）、BUSHI、石森太二、高橋ヒロム……といった面々になっている。ライガー辺りは絶対王者という時期があったかもしれないが、最近でもやはり皆、ジュニアの王者を目指し奪い合うから、絶対王者という存在が出にくくなっている。

ちなみに、クリス・ジェリコは１９９７年にスーパー・ライガーとして登場。翌年の１９９８年には、第２代ブラック・タイガー（エディ・ゲレロ）と組み、IWGP ジュニアタッグ王座にも挑戦しているようだ。

ジュニアにしても、WWE のクルーザー級にしても、ヘビーと比べるともう少し盛り上がらない。ジュニアに留まるか、ジュニアを踏み台にヘビーに行くケースが続いている。（終）

７．スターダム。

２０２０年９月５日（土）

ジュリア、ワンダー・オブ・スターダム王座戴冠！　舞華もフューチャー王者へ！

２０２０年７月 26 日の、後楽園ホール、ワンダー・オブ・スターダム王座決定戦が、ユーチューブの『We are STARDOM！！』でようやく放送された。星輝ありさの引退で、王座返上となり、４人でトーナメントが行われて、中野たむが、刀羅ナツコを破り勝ち上がり。ジュリアが、小波を破り勝ち上がり。よって、中野たむ　ー　ジュリアの王座決定戦となった。確かではないが、たむは右腕にありさの色をあしらった、黄色い腕輪のような飾りをつけて臨んだ。ジュリアは、以前からかもしれないが、白い髪を結んでかわいいスタイル。そして、身体はコスチュームをつけていても物凄く鍛え抜かれた肉体をしていた。

私は、さすがに１か月以上前なので、ジュリアが勝つ結果は知っていたが、流れとしては、ジュリアが先に仕掛けて、グロリアスドライバーなどに行くが、これはたむが返して、すぐあとのジュリアの STF は読んでいた。すると、今度はたむが、タイガー・スープレックス・ホールドなど必殺技を出すが返される。すると、ジュリアが両足でたむの首を足で挟み込んで息ができない新技を出した。これでも勝てそうだったが、ジュリアは必殺技ステルス・バイパーを出すと、たむはタップをしなかったが、意識が飛び、レフェリーストップ（画面ではドクターも×（バツ）を出して）ドクターストップのような形でジュリアの勝ちとなった。

ジュリアは自分のキャリアとしても、シングル王座は初戴冠。新ワンダー・オブ・スターダム王者に輝いた。

たむも余程悔しい気持ちがあったのか、８月 22 日、８月 23 日の横浜２DAYS、横浜武道館の２日目のメインイベントで再戦する予定だったが、その興行は流れて中止となった。たむとしても今までの技を貫くか、新しい技を開発するかなど、考えないと勝てないかもしれない。ジュリアは相当強い王者だ。私としてはどちらが勝つとしても楽しめる、２人共応援する。あとは、スターダムのこの横浜武道館のカードがスライド式にどこかで行われてほしいという気持ちだ。それだけ、この日のカードのラインナップは良かった。

更に前になるが、２０２０年７月 17 日　フューチャー・オブ・スターダム王座決定　巴戦各 15 分１本勝負。では、舞華、飯田沙耶、上谷沙弥の３人が巴戦という形で戦い、最後は舞華が沙弥を舞華カッター。続く、沙耶を片羽締め。で破り、（途中では、腕ひしぎ逆十字固めでも沙耶から勝利した）。フューチャー王者に輝き、同じユニット、ドンナ・デル・モンドのジュリアと同じく、自身シングル王座初戴冠を果たした。

その他のスターダムの王座では、第 18 代ゴッデス・オブ・スターダム王座決定戦。
〇林下詩美＆上谷沙弥　ジャーマン・スープレックス・ホールド　●ジャングル叫女＆小波で、詩美、沙弥組が王者に輝いた。詩美の出番が目立ったので、沙弥も目立って欲しい。

ハイスピード選手権。３WAY 戦。　〇AZM　ー　里歩　ー　●スターライト・キッド　あずみ寿司。で、AZM が新王者に輝いた。進化するスターダムは凄く面白い団体だ！　（終）

２０２０年9月16日（水）

柴雷イオの、スターダム時代の、団体のTOP王座を持つ重荷。

『覚悟～「天空の逸女」柴雷イオ自伝～』（柴雷イオ／彩図社）参照。

イオは、いまやWWEの“NXT”で、NXT女子王者に君臨する女子スーパースターである。もちろん、今も多少は“NXT”の女子王者として、重圧を背負っているかもしれない。だが、この本を読むと、イオはスターダムで最高位王座であるワールド・オブ・スターダム王者になった時のほうが、よりTOPとして団体を背負うことになり、孤独でもあり、「なんでこんなベルト獲ってしまったのだろう」と泣く時もあったようだ。私のようなプロレスファンにはわからないが、プロレスラーは特に団体を代表する最高位王者を巻いた時、さまざまなプレッシャーと戦うのだろう。「下手な試合はするわけにはいかない」とか、「王者らしく戦うとは何か？」とか。

新日本プロレスのIWGPヘビー級王座戴冠回数最多の８回を記録した棚橋弘至や、最多連続防衛回数12回や、最多通算防衛回数30回のオカダ・カズチカなども、「王者になったあの時期はきつかった」と話していた。

イオと同じく、スターダムにいたカイリ・セイン（WWE所属）（スターダムでのリングネームは宝城カイリ）も、スターダムの最高位王座、ワールド・オブ・スターダム王者に輝いているが、その時は私もカイリの存在を知らなかったのでわからない。しかし、２０１７年、WWE・メイ・ヤング・クラシック（以下、MYC）で優勝して、一気にここでカイリに重圧がかかってしまったようだ。カイリは“NXT”に登場するようになるが、シェイナ・ベイズラーという強力なライバルが現れたこともあって、なかなかNXT女子王者のベルトが掴めない。カイリは「あの時、MYCで優勝したのに“NXT”では王者にしばらくなれず、優勝しなければ良かったかもしれないとも考えた」と話していた。しかし、１度はNXT女子王者を獲得して、その後メインロースター（１軍）に上がり活躍していった。

勝手にプロレスファン目線で見てしまうと、スターダムでTOPの王座を持っている時のほうが、WWEの女子王座を持っているよりも楽なポジションに見えるといったら言い過ぎだろうか？　例えば、WWE・ロウ女子王座のASUKAや、NXT女子王座の柴雷イオは、王者ではあるが、男子のWWE王座やWWEユニバーサル王座、NXT王座よりかは、責任を負わなくていいポジションではないか？　そもそも男子だって、３つのブランドの王者がいるから、団体を１人で背負っているという感覚にはならない気もする。（でも、規模は全く違うが）。

逆に王座を獲ることは慣れているからプレッシャーにならないという選手もいるかもしれない。リック・フレアーとか、ジョン・シーナ、トリプルH、ザ・エッジ、ランディ・オートン、ブロック・レスナー、ローマン・レインズ……など。

イオはスターダムで最高位王者を目指して、獲得したらプレッシャーと戦った。今はWWEのNXT女子王者だけど、スターダムの経験も活きて、イキイキと活躍しているのかな？　（終）

２０２０年9月23日（水）

岩谷麻優はROHにも参戦したが、柴雷イオやカイリ・セインのWWEと比べてどうか？

スターダム３人娘ことスリーダムと言えば、柴雷イオ、カイリ・セイン（元、宝城カイリ）、岩谷麻優のことである（だった）。

まず、２０１７年に、カイリがWWEに移籍した。しかし、２０２０年にWWEをおそらく円満な形で離脱した（今は、WWEのサポートで所属）。２０１８年には、イオがWWEに移籍した。そして、麻優だけがスターダムに残り、団体のトップとして引っ張っている。

麻優は日本に残ったというから、海外には行きたくないのかな？　と思ったら、ROH（リング・オブ・オナー）のニューヨークMSG（マディソン・スクウェア・ガーデン）の試合に出場していた。私がユーチューブで見つけた１試合では、ROH女子世界王座の、WOH世界選手権トーナメントの準々決勝の試合で、麻優とディオナ・プラゾという女子プロレスラーが戦っている試合があった。麻優はスターダムの時のように入場用のみのマスクを被って入場、戦う時は素顔だ。ディオナという選手も特別に仕掛けるとか、恐ろしいタイプの選手ではないように見えた。序盤はグラウンドでリストを取りあったりして、一呼吸置いた。中盤では場外のディオナに、コーナーから麻優がボディ・プレスに行くが、着地の際にディオナが麻優の腕を場外で捕獲して、フジワラ・アームバーに行った。ディオナはリング上でも、フジワラ・アームバーを狙ったが、麻優はロープエスケープ。やはり、麻優はロープエスケープをする能力は高いのだろうと思った。最後は、二段式ドラゴン・スープレックス・ホールドで勝利した、準決勝進出だ。このトーナメントには、よく見ると、花月やHZKといった、共に現在は引退したスターダム勢も参戦していた。

WWEは確かに、世界一のプロレス団体と言っていいだろう。私は、最近のWWEはほとんどカットされているから、１試合フルバージョンの形がないので、よくわからないのだが。

それに比べて、スターダムは日本ということもあるので、私は、動画サービスの“STARDOM WORLD”には加入していないが、ユーチューブでスターダムの試合をチェックできる。

WWEでは、イオの試合を運が良ければ、“NXT”ミックスリスト、というユーチューブがあれば、そこで試合を見られる。カイリは離脱した為、今は見られないが、離脱前はカットされたシナリオをかろうじて見られた。縦笛を吹くシーンなどが有名（笑）。

プロレスファンの私からいうと、WWEもいいけど、スターダムもいい。WWEの良さは知っているけど、放送してくれないのなら見られないだけとなる。だから、イオを必死に探しながら、日本では落ち着いて麻優の試合は、ある程度のフルバージョンやマイクアピールを見られるという状態である。だからどちらのほうが凄いとも言えないのだ。

だから、イオは世界一の団体で活躍しながら、麻優は日本や、ROHのような海外に参戦する形でいいのではないだろうか？　イオやカイリも凄いが、麻優も日本で輝いている。（終）

２０２０年9月29日（火）

岩谷麻優は、赤いベルト王者だが、本当に強いチャンピオンなのか？

女子プロレス団体、スターダムの最高位王座、ワールド・オブ・スターダム王者（赤いベルト王者）は、現在、岩谷麻優である。去年２度目の獲得をして、ここまで３度の防衛を果たしている。スターダムのエグゼクティブプロデューサーのロッシー小川さんが、今年の１月にテレビでスタートした『We are STARDOM！！』の番組で、ユニット、STARSの麻優をワールド・オブ・スターダム王者へ。星輝ありさをワンダー・オブ・スターダム王者（白いベルト王者）に据えた売り出し方はかなり良かったと思う。(その後、ありさは引退したが)。

麻優は防衛を進めていくと、現、WWE所属が決まっているが、コロナ禍でアメリカに渡航できないSareeeからの赤いベルトへの挑戦のビデオメッセージを受けた。事実上のスターダムとWWEの代理戦争にも感じられる。しかし、この試合はSareeeの体調不良を理由に中止となる。そこで現れたのが長与千種の団体、マーベラスの、元スターダムの選手、彩羽匠だった。この試合はノンタイトル戦でおこなわれた。おそらく、Sareee の穴埋めとして、ロッシー小川さんが、長与千種に緊急で頼んだのだろう。しかし、匠を負けさせたら立場がないので、ノンタイトル戦にして匠が麻優に勝つというアングル（シナリオ）になったと思う。試合は匠が長与直伝のランニングスリーで勝利した。麻優は「次はタイトルに挑戦してきてください」と言ったが、今度は麻優が勝ちそうだ、わからないけど。というわけで麻優はここで負けている。

そして、「シンデレラトーナメント２０２０」というシングルのトーナメントもおこなわれた。麻優は木村花と１回戦で激突したが、２人がコーナートップロープに上ると、２人して一緒に場外に落ちて、このトーナメントのルール上、オーバー・ザ・トップロープをした選手は敗退なので、麻優はここでも敗れた。ちなみに優勝したのは、スターダムで売り出し中のジュリアだった。

更に、『スターダム　５☆スター GP　２０２０」では、私の知る限り、麻優は開幕戦でジュリアに開脚式のグロリアスドライバーで敗れて、小波の変形のトライアングルランサーでも敗れていて、優勝は林下詩美にさらわれている。麻優はまたしても優勝できなかった。

しかし、ロッシー小川さんも、赤いベルトを持つ、麻優をわざわざ持ち上げる必要もないから、これからエースになっていく、ジュリアや詩美を優勝させたのだろう。

私は最近、麻優の試合を、ユーチューブでよく見るようになったが、最初はあまり強くないけどプッシュされているのではないか？　と思っていた。しかし、そうではなく、麻優はやっぱり強かった。２人共、元スターダムの、WWEの柴雷イオや、元WWEの、カイリ・セイン（元、宝城カイリ）にも勝っている映像もあり、昔からこんなに強かったのだなと思った。

今後は、朱里や、勝てば、詩美といった選手と赤いベルトを懸けて戦うことになるだろう。

麻優はキャリアもあり、赤いベルトが懸かれば負けない、スターダムのアイコンだ。(終)

２０２０年10月３日（土）

林下詩美の、赤いベルトへの挑戦権順番、余計な衝突を避ける。岩谷麻優の過酷防衛ロード。

女子プロレス団体、スターダムの最高位王座、ワールド・オブ・スターダム王座（赤いベルト）への人気が激しい。今、ベルトを巻いているのは、岩谷麻優である。まず、以前、横浜武道館８月 22 日、23 日の興行が新型コロナウイルスの影響で中止となり、ワールド・オブ・スターダム選手権、岩谷麻優　－　朱里の一戦が流れた。しかし、今度、岩谷麻優　－　朱里の試合はきちんとタイトルマッチでおこなわれることとなった。

しかし、「スターダム５スター☆グランプリ２０２０」を優勝したのは、林下詩美だった。リングで麻優、朱里、詩美が顔を揃えた時、詩美は「（赤いベルト戦で）麻優さんと、朱里さんの勝者に私は挑戦する」ということで、話はまとまっていた。

だが、最近、スターダムマットに、長与千種の団体、マーベラスの、彩羽匠などが登場して匠は詩美に、「私は、以前から赤いベルトを懸けて、岩谷麻優さんと闘う約束をしていたの。だから、麻優さんと朱里さんの勝者に最初に挑戦するのは、私なんだけど」と言って、詩美にマイクを渡すと、「それなら先に挑戦していいですよ、最終的に私が、誰であれ、赤いベルトに挑戦します」とあっさり順番を譲ってしまったのだ。今までのプロレスファンの見方からしたら、詩美が「ふざけんな。私が『スターダム５☆グランプリ』を優勝したのだから、私が先に挑戦するはずだろう。なら、こうしよう。私と彩羽匠さんで勝ったほうが、赤いベルトに挑戦できる、ということにしましょう」という流れでくるのかと思ったが、詩美は余計な抗争をして、権利を失うことを嫌がったのかもしれない。詩美は性格が優しい（おっとりした）ところがあるから、匠と口喧嘩したりするのも嫌だったのかもしれない。

更に、麻優は人気者という言い方か、狙われるという言い方か、わからないが、「スターダム５スター☆グランプリ」では、ジュリアや小波にも負けている。もしかしたら違う選手にも負けているかもしれない。そういう意味ではこの２人も赤いベルトの列に並んでも資格は十分にあると言える。

整理すると、赤いベルトの王者に麻優。（挑戦者の列が）朱里、匠、詩美、ジュリア、小波……という包囲網ができているかもしれない。これは、麻優は過酷だ。

更に私が、本屋の雑誌の表紙を見た上では、WWE 所属だが、アメリカへ渡航できない Sareee が、しばらくの間は日本で戦ってもいいという許しが出たようだ。以前は Sareee の体調不良ということで赤いベルトの試合は流れたが、最近改めて、雑誌で Sareee が「麻優と闘いたい」という発言をしている。だが、Sareee が WWE に行くのに、赤いベルトを取ってしまうことはあり得ないから、この試合はノンタイトル戦になるだろう。更にスターダムの麻優と、WWE の Sareee ということで、勝敗をつけてしまうのは問題かもしれない。すると引き分けが濃厚か？　それでもいいが。

麻優は嬉しいほどに、赤いベルトを狙うライバルに囲まれている。防衛できるか？　（終）

８．WWE“NXT”。AEW“Dynamite”。スターダム『We are STARDOM！！』

。

２０２０年11月20日（金）

“NXT”、柴雷イオ防衛。AEW、NWA女子王座サンダー・ロサ奪えず。岩谷麻優、匠から防衛。

今に始まったことではないが、プロレスは男子も楽しいけど、女子プロレスも面白い。

WWE の“NXT”では、なんとメインイベントで、NXT 女子選手権、（王者）柴雷イオ　－（挑戦者）リア・リプリーの超実力者同士の一騎打ちがおこなわれたが、最後はイオがムーンサルト・プレスでリアから３カウントを奪い防衛。途中では裏足四の字固めの形で持ち上げられ回転させられるピンチもあったが、リアという体躯もはるかに大きい強豪を破り逞しくなった。他には、エンバー・ムーンや、トニー・ストームという、ベビーフェース組の、強敵が列を作っているので、どういう順番になるかわからないが、イオに防衛して欲しい。だが、私は昔、女子プロレス団体、スターダムにもいたトニーも好きなので、その試合、イオ　－　トニーが実現したら、どちらも応援する。「メイ・ヤング・クラシック２０１８」の再現。とにかく、イオ、防衛おめでとう。

AEW では、AEW 女子世界王者は志田光だが、以前から NWA 女子世界王座も AEW でおこなわれている。NWA 世界女子王座という呼び名から、正式に NWA 女子世界王座に名前を揃えたようだ。NWA 女子世界選手権、（王者）セレナ・ディーブ　－　（挑戦者）サンダー・ロサの試合は、サンダーがペースを掴んでいたが、ブリット・ベイカーが試合に乱入して、サンダーに攻撃をしたので、セレナが変型のペディグリーのような技で、サンダーから３カウントを奪い防衛した。AEW 女子世界王者の光は来週試合をするが、ブリットの狙いが、光の AEW 女子世界王座ではなく、NWA 女子世界王座やサンダーに向いているので、良いのか悪いのか、光は強敵との戦いが遠回しになってしまっている。でも AEW に、NWA 女子世界王座があるのは面白い。

スターダムのユーチューブの番組『We are STARDOM！！』では、２０２０年10月18日、後楽園ホールで行われた、ワールド・オブ・スターダム（赤いベルト）選手権試合、（王者）岩谷麻優　－　（挑戦者）彩羽匠の試合がおこなわれたが、最後は、匠が師匠の長与千種から譲り受けた大技ランニングスリーに行くが、麻優が天才的に丸め込んで勝利、防衛した。今年２月のノンタイトル戦では、麻優は攻められすぎたという反省も活かして、少し攻撃をしている時間が長かったと感じた。それでも、麻優は左足を痛めていて、匠のストレッチマフラーに苦戦する。しかし、麻優は掟破りというか、麻優も長与に教わったランニングスリーを決める場面もあった。会場にはマーベラス代表の長与もいた。試合後、スターダム、エグゼクティブプロデューサーのロッシー小川さんが、親指を立てて、麻優にグッドのポーズ。

しかし、麻優は11月15日に、林下詩美に敗れて、赤いベルトを失ってしまった。（終）

２０２０年11月26日（木）

AEW、志田光、王座防衛！　NXT、トニー・ストーム、ヒール転身！　ジュリアや舞華、防衛！

この日は、AEWの“ダイナマイト”で、第３代のAEW女子世界王者にして、絶対王者の志田光が、ダーク・オーダーのアンナ・ジェイとタイトルマッチで対決した。プロレスは絶対勝つという保証はないという意味では楽しめる。アンナはセコンドに、タイ・コンティや、ダーク・オーダーの面々を引き連れて登場した。ピンチは、タイがアンナにイスを渡す間に、レフェリーがそれに気を取られ、ダーク・オーダーの男が竹刀をアンナに渡して、光の足に一撃を食らわせた場面はヒヤリとしたが、光は見事に返した。最後は結構あっけなく、光がTamashii からエビ固めで勝利した。しかし、エントランスで光がベルトを掲げていると、怪奇派のアバドンが現れ、血を吐き、ベルトを舐めた。次の挑戦者になりそうだが、光の相手としては物足りないだろう。

WWEの、“NXT”では、キャンディス・レラエがセコンドの介入もあり、エンバー・ムーンを倒すと、レラエ、ダコタ・カイ、ラクエル・ゴンザレスがリンチ。そこにトニー・ストームが救出のような形で現れたが、トニーは急にエンバーに攻撃して、４人で痛めつけた。更には、リア・リプリーがマイクで喋っていると、NXT王者の柴雷イオがやられて担がれて現れた。イオは通路に投げ捨てられて、今度は４人がリアを襲撃した。トニーはヒール（悪玉）になって、TEAM キャンディス入りをした模様。私の中では、トニーは絶対的なベビーフェース（善玉）でいて欲しかった。イオとトニーのタイトルマッチはあるのか？

ユーチューブの『We are STARDOM！！』を見た。女子プロレス団体、スターダム。
２０２０．10・29　後楽園ホール。フューチャー・オブ・スターダム選手権試合、（王者）舞華　－　（挑戦者）上谷沙弥の試合は、舞華が、炎華（えんか）落としで防衛した。舞華は細そうに見えて、柔道を長年やってきたせいか、体躯がしっかりしていると語られている。試合中も、おしとやかに見えて、「もっと打ち合おうぜ！」と言うなど、そのギャップが私は好き。試合後は飯田沙耶がリングに上がり挑戦表明をした。

２０２０．10・29　後楽園ホール。ワンダー・オブ・スターダム選手権試合、（王者）ジュリア　－　（挑戦者）ひめか、の試合は、ジュリアがグロリアスドライバーで２度目の防衛に成功した。序盤は私の見方としては、ジュリアのほうが戦い方は巧いと思ったが、中盤の打撃の打ち合いは五分五分だった。ジュリアの背中の筋肉はまさにアスリートで凄いと思った。ひめかはギョロッとする目の表情などが、面白いなと思った（笑）。試合後、ジュリアが悪の女寝業師、小波を次の対戦相手に指名した。ひめかはジュリアに負けて、泣いていたが、ジュリアももらい泣きしそうになりながら、強く握手していて、私も涙した。（終）

２０２０年12月10日（木）

“NXT”、柴雷イオとトニー・ストーム開戦の予感。AEW、志田光とアバドン。スターダム。

最近の木曜日は、WWEの“NXT”の柴雷イオ情報。AEWの志田光情報。そして、日にちはだいぶ以前に放送されたものだが、『We are STARDOM！！』の３つの女子プロレスラー情報を載せる傾向になっている私。それ以外の男子などの放送は書くことがあれば、それもプロレスコラムを書いて、載せているというやり方だ。

まず、WWE、“NXT”では番組途中、トニー・ストームがインタビューを受けていたが、そこにNXT女子王者の柴雷イオが登場して挑発した。すると、永遠のライバル、イオとトニーが大乱闘。そこにイオの援護にエンバー・ムーンが加わり分けられた。イオは王者の風格がある。

メインイベントでは、ラクエル・ゴンザレスが、トルネードボムで、エンバー・ムーンから勝利。すると、トニーが登場して負けたエンバーを見下していたが、リア・リプリーが登場したので、ラクエルはトニーを下げて、リングではラクエルとリアが睨み合ってエンディングを迎えた。私は、NXT女子選手権で、イオ　－　トニーの試合を見たい。

AEWでは、怪奇派のアバドンが登場した。私は、あまりにも顔がグロテクスなコンタクトレンズや化粧をしているので、「気持ち悪いな」と発したほどだ（笑）。アバドンはタシャ・プライスに勝利した。試合後、AEW女子世界王者の志田光が竹刀を持って登場。アバドンの頭に竹刀で一撃して、光はタシャを抱えて逃げようとするが、アバドンはすぐに起き上がったので、光とタシャは、エントランスのほうへと逃げて行った。光　－　アバドンのAEW女子世界選手権も、そろそろおこなわれるかもしれない。

女子プロレス団体、スターダムの、『We are STARDOM！！』では、ゴッデス・オブ・スターダム・タッグリーグ戦がおこなわれて３試合が放送された。

渡辺桃＆AZM　－　岩谷麻優＆スターライト・キッドでは、桃がキッドをテキーラサンライズで破った。

朱里＆ひめか　－　ジュリア＆舞華の、DDM（ユニット／ドンナ・デル・モンド）対決では、舞華が、ひめかから、片羽絞め～体固めで３カウントを奪い勝利。ひめかは「肩は上がっていた」と抗議したが、覆らず、舞華はこのメンバーの中でも結果を残した。

２０２０．11．８　ゴッデス・オブ・スターダム・タッグリーグ優勝決定戦、渡辺桃＆AZM　－　ジュリア＆舞華。桃が舞華をピーチサンライズで破り、第10回ゴッデス・オブ・スターダム・タッグリーグ優勝を果たした。次は王者、林下詩美＆上谷沙弥のベルトに挑戦。（終）

２０２０年12月17日（木）

WWE“NXT”、トニー・ストームの肉付きに惚れる。AEW、オメガのそっけないフィニッシュ。

この日は、WWEの“NXT”では、NXT女子王者の柴雷イオに出番がなかった。
そして、AEWの“ダイナマイト”には、AEW女子王者の志田光の試合はなかった。しかし、前日の“ダーク”で試合をしている。

“NXT”では、KUSHIDAが登場したが、KUSHIDAのレスリングは、しっかりしていて惚れ惚れする。基本が凄い。
カイル・オライリーは、１対１ながら実力でピート・ダンを破り、NXT王者のフィン・ベイラーへの挑戦が決まったようだ。
トニー・ストームは、ラクエル・ゴンザレスの助けはあったものの、リア・リプリーをストロングゼロ（タイガードライバーと同型だと思う）で破った。トニーはかっこいい女性で、太ももとお尻の肉付きがよく、ビッグサイズなところにも惚れる。
キャリオン・クロスが“NXT”復帰戦を胴締めスリーパーホールドで勝利した。前回はキース・リーを倒してNXT王者になるも、怪我か何かで、すぐにNXT王座ベルトを返上した。

AEWでは、「TEAMタズ」に対して、スティングが黒いバットを持って登場。スティング、コーディ・ローデス、ダービー・アリンの３人はアイコンとして絵になる。
クリス・ジェリコが率いる、ヒールユニット、インナーサークルは12人タッグを戦ったが、最後は圧倒的にインナーサークルが、ベビーフェース軍から勝利した。
前日のAEW“ダーク”では、光が登場したが、カイリーン・キングから勝利した。しかし、光が勝ってコーナーで勝ち名乗りを上げていると、怪奇派のアバドンがやってきて、光にゴリーボムを食らわせた。光にはスカイラー・ムーアや、タイ・コンティ、ビッグ・スウォール……などと戦ってもらいたい。来週、“ダイナマイト”で、光の、アクションがあるというテロップが出た。あと、AEWにも女子世界タッグチーム王座を作ったほうがいいと思う。
オメガは、メインイベントでジョーイ・ジャネーラと戦ったが、オメガはテーブル貫通の一撃を食らったのに、その後、平然と早めに攻めて、片翼の天使につないだ。意味をもたせるならもっと寝てなきゃいけないが、すぐに起きたオメガ。でも、プロレスラーの表現はどういう風でもありだろう。
試合後、PACの一同、レイ・フェニックスと、ペンタ・エル・ゼロ・ミスド（ペンタゴンJR）が登場して、オメガに対して、フェニックスが対戦表明。しかし、AEW世界王座が懸かるかは不明。

この日のWWE“NXT”と、AEW“ダイナマイト”には、イオと光の登場がなくて残念。（終）

９．他団体、レジェンド。

２０２０年８月２日（日）

武藤敬司の懐（ふところ）へ飛び込む、ノアの清宮海斗。８月 10 日横浜文化体育館決戦！

久々に新日本プロレスではない、日本の男子のプロレス団体に動きがある。先日、私はコンビニで東京スポーツの新聞を買ったら、「秋山準、（全日本プロレスから）DDT（プロレスリング）へレンタル移籍」という記事があった。どうやら秋山は、残り２年でデビューから 30 周年を迎えるので、そこを引退とは明言していないが、節目としているようだ。

その東スポの記事の中で、プロレスリング・ノアの清宮海斗（23 歳）の注目的な記事があった。内容は「俺はもう武藤敬司しか見えない！」というもの。かつて武藤とは６人タッグ戦、通常のタッグ戦と戦ったが、特にグラウンドを中心にレスリングでこてんこてんに遊ばれてしまって、「こんな感覚は初めてだ！」と発言したらしい。そして、先日、清宮は武藤に対して、「８月 10 日横浜文化体育館で、シングルマッチで戦ってください！」と言うと、武藤は OK を出したようだ。

武藤は以前、似たようなケースで言えば、全日本プロレス所属時代、当時の新日本の IWGP ヘビー級王者の中邑真輔と戦い、キャリアの差で中邑からベルトを奪ったことがある。その時でさえ武藤と中邑の年齢は離れていた。

関係ないが、ベテラン　－　若手の構図でいうと、第 15 回Ｇ１ CLIMAX では、準決勝で蝶野正洋　－　中邑があったが、蝶野が勝利。中邑は「自分がしたいことを封じられた」というような発言をして悔しがり、キャリアの差を認めた。

話は戻るが、清宮は、武藤というプロレスの職人だが、歳を取っているはずの人物に勝てるだろうか？　これが寿司屋なら、普通は、大将が一番に寿司を作るのが巧く、若い弟子はそれより劣ることになる。しかし、プロレスの場合、老いたら大将だったものも力が落ちていく可能性はある。だが、武藤の場合は、更にプロレスを極めてしまって、その自分の年代ごとに自分のプロレスをしている気がする。清宮は「武藤敬司に勝つ作戦はある！」ということを言っていた。素人考えで言えば、武藤の弱点はヒザである。そのヒザの皿に攻撃を加えていけば、清宮は勝てる可能性はあるとは誰もが最初に考えるだろう。しかし、武藤はそれをさせないと思うし、もしもそういう展開になっても、形勢を逆転して勝ってしまう気がする。武藤の寝技地獄。場外を利用する。そして、中盤以降の立体的な戦いの場面においても、武藤の懐（ふところ）で清宮は遊ばれてしまう気がする。

でも、若い 23 歳の清宮は、新日本以外は日本のプロレス団体でニュースはないのか？　という中で、武藤の名前を上げて挑戦状を叩きつけたことは非常に面白いニュースだ。更に、清宮は、新日本の“レインメーカー”オカダ・カズチカにも挑戦状を送り、「オカダを体感したい！」と語っているようだ。まずは武藤だが、ここで正直負けるにしても、何か爪痕を残せるかに注目。その上で、いつかオカダとの対戦も見たいが、今は実力差がありそうだ。

清宮は、“令和の革命児”になる素質がある。若いのにニュースをばら撒きまくる。（終）

２０２０年９月１日（火）

蝶野正洋、STF（ステップオーバー・トーホールド・ウィズ・フェースロック）。セメント技！

蝶野正洋で思い出す技といえば、STF（ステップオーバー・トーホールド・ウィズ・フェースロック）だろう。

『自叙伝　蝶野正洋 MASAHIRO CHONO I am CHONO』（蝶野正洋／竹書房）参照。

・確かに（ルー・）テーズ道場で何か技の一つでも習得して帰るのも悪くない。（中略）スパーリングパートナーは全く身動きがとれないでいた。「セメント技だけどね」（中略）もともとは拷問台の意味を持つ『BACK』という古典的な技らしく、テーズさんの師匠であるレイ・スチールというレスラーが使っていたらしい。（以上、引用）。

私は、STF を、蝶野が使っていた以前に、テーズが使っていたことは知っていたが、テーズの師匠のスチールが使っていたことは知らなかった。もし、スチールも誰かに教わっていたと考えると、物凄い歴史がある技だと感じる。ここで注目したいのは、おそらくテーズが発言した「セメント技だけどね」という発言だ。私が、プロレスの「セメント」という言葉を調べても、シュートやガチと一緒で「真剣勝負」という表現しかでてこない。だから、「マジ」とか「本気」という意味で考えてもらうとわかりやすいかもしれない。私はほとんど蝶野の STF しか知らないが、原型 STF、STF や、クロス式 STF、FTS（裏 STF）、STS などを使っている時期もあった。STF はテーズいわく「セメント技」だが、蝶野の STF はそれでも、相手に逃げられてロープエスケープをされることもあったから、蝶野の中で本当に試合の決着を決めるまでは、少し加減を抜いて逃げられるようにしていたのかもしれない。それでも、私の中では、蝶野のクロス式 STF は絶対逃げられないだろうと思って見ていた。

日本でも闘龍門（現、ドラゴンゲート）の１期生、マグナム TOKYO は、変形 STF（ステップオーバー・トーホールド・ウィズ・フェロモン）という、ウィリアム・リーガルのリーガルストレッチの同型を使っていた。全日本プロレスの渕正信も、テーズの関係があったのか、STF を使っている。私は、全日本の興行で、蝶野　ー　渕の STF 対決を観に行ったが、最後はケンカキックで蝶野が勝った。WWE では、ジョン・シーナが、STF-U という技を使っていた。これは、相手のアゴをチンロックで極めながら、腕で相手の頸動脈を締めるスタイルだ。だが、放送コード上の問題で普通に STF という名前で使うようになったようだ。武藤敬司も最近は、蝶野との友情関係からか、序盤のグラウンドで STF を使い、そこからクロスフェースに繋ぐムーブ（動き）をするようになった。女子プロレス団体、スターダムのジュリアは、STF は中技で使うが、フィニッシュ技はステルス・バイパーという、裏 STF とドラゴンスリーパーの合体技を使う。

蝶野の自叙伝で、テーズが言うように「STF はセメント技」ということが知れて良かった。でも、MMA では使えない技だろう。（終）

２０２０年9月12日（土）

グレート・ムタは、アメリカマットでは、足四の字固めではなくアキレス腱固め、を使う。

武藤敬司の化身は、グレート・ムタだが、昔のアメリカのマットでは特に、１人のプロレスラーが使うフィニッシュホールドを、違う選手がフィニッシュにするのはご法度だった。フィニッシュに限らず、繋ぎ技としても使うのは駄目だった。

だが、最近はプロレスラーの数もどんどんと増えていて、パクリ合いの状態である。

ムタのいつの頃かはわからないが、TNA か？　現在のインパクト・レスリングのムタ　ーミスター・アンダーソンの試合のユーチューブの試合を見た。一言で言えば、ムタのレスリングはクラシック。ファンもムタがあまりわからないせいか、ムタへの声援は特になく、アンダーソンには声援が送られた。しかし、試合が始まると、ムタは腕にグリーンミスト（緑の毒霧）を吐いた。そこからはゆっくりとしたグラウンドレスリングが展開されていくが、ムタが一方的に攻めて、ムタもアンダーソンに攻めるチャンスを与えるが、アンダーソンはどう攻めていいのかわからず、強引にストンピングなどをするしか方法がない状態になった。ムタの攻めで上手かったのはだいぶ前から使っている攻め方だが、蝶野正洋 ISM の、STF（ステップオーバー・トーホールド・ウィズ・フェースロック）で絞り上げて、アンダーソンがロープを掴みかけたところで、クロスフェースに切り替える頭脳的な関節技地獄だ。ムタはその後も、ドラゴンスクリュー（レッグレイス）などを畳みかける。ここで、この時代になっても、レガシー（遺産）を守るがごとく、リック・フレアーなどが使う、足四の字固めは使わないで、昔と同様にアキレス腱固めを出した（ご存知の通り、武藤の素顔の場合は、足四の字固めである）。私の記憶はわからないが、日本でムタをやる時は、アキレス腱固め？　か、足四の字固め？　のどちらかだ。アメリカでは、武藤なりにしきたりを守っているところが良い。アンダーソンにロープエスケープされると、場外のリング下を物色した。そして、イスを取り出して、リングに上がろうとすると、レフェリーがムタと揉めたが、レフェリーがイスを片付けている隙に、ムタがアンダーソンに毒霧を吐いた。アンダーソンが膝立ちになったところで、ムタはシャイニング・ウィザードを浴びせて勝利。ムタはアンダーソンの顔を緑の舌ベラで舐めた。アメリカの女性ファン２～３人ほどは、ムタに対してブーイングのポーズをしていたが、若いファンかもしれない。今のアメリカでクラシックレスリングを通したのだから、若いファンからはブーイングがあったかもしれない。でも、やはりレジェンド（伝説）だけに、アメリカのファンからは尊敬されているような空気も感じた。

私は、ユーチューブで、ムタであれ、誰であれ、見たくない時は単純に試合を見るのをやめる。だが、ムタが日本のマットで戦う試合ではなく、アメリカのマットで戦う試合はどうしても見たくなる。やはり、レスリングが最高に巧いから。そして、繰り返すが、ムタは、アメリカマットで足四の字固めを封印して、アキレス腱固めを使っているのが良い。（終）

２０２０年9月20日（日）

桜庭和志のUFC殿堂入りもいいが、藤田和之が表彰されてもいい。

かつて、１９９０年代後半～２０００年代に、PRIDE（MMA-ミックスド・マーシャル・アーツ／総合格闘技の団体）が日本にあった。桜庭和志は、元はUWFインターナショナルというプロレス団体に所属していて、ある試合後「プロレスラーは、本当は強いんです」と言うなど、一応はプロレスラーという名目だった。今はMMA戦士とプロレスラーだ。

その、PRIDEで桜庭は、アメリカのMMA団体、UFCで旋風を巻き起こしたグレイシー一族を、次々に倒していく。特に90分を戦い抜いた、桜庭　－　ホイス・グレイシーはあまりにも有名であり、最後はホイス陣営がタオルをリングに投げて、負けを認めた。桜庭の勝利である。

その後、PRIDEは崩壊して、UFCに吸収されることになった。そして、この桜庭　－　ホイスや、桜庭　－　グレイシー一族の一連の試合が評価されたのか、桜庭はUFCの殿堂入りを果たすこととなった。おそらく日本では史上初の快挙だろう。

しかし、ヘビー級にも、元、新日本プロレスの藤田和之がいた、藤田は新日本でも異種格闘技戦を戦うなど、プロレスよりもMMAスタイルに向いている逸材だった。私もまだ、プロレスを見始めの頃、東京ドームで藤田　－　キモを見たが、藤田のペースだったが、膝蹴りがキモの急所に入ってしまい、藤田は反則負けとなってしまった。しかし、その後、新日本を離れPRIDEに参戦すると『霊長類最強の男』と言われた、マーク・ケアーに判定勝ち。その後も、ケン・シャムロックとの一戦では、シャムロックが藤田を殴っても、殴っても、倒れないので根負けして、セコンドに“タオル投入”を要求して、タオルが投げられ、藤田が大変名誉な勝ち方を収めた。しかし、他の試合では、PRIDE以外も含めるが、ミルコ・クロコップに２連敗。エメリヤー・エンコ・ヒョードルに敗退。マーク・コールマンに敗退。ヴァンダレイ・シウバに敗退という結果になっている。高山善廣には勝利を収めたが、UFCのレジェンド、ドン・フライやジョシュ・バーネットとはプロレスのリングで戦うことはあっても、MMAのリングで戦うことはなかった。藤田がもう少し、UFC系の大物を破っていれば、UFC殿堂入りをしていたかもしれない。

藤田はMMAに参戦しながら、新日本プロレスなどにも参戦した。IWGPヘビー級王者はなんと３回も獲得している。最近の藤田はわからないが、WWE所属のランディ・オートンが使う危険な技パント（キック）（四つん這いの相手の顔面に向かって勢いよくキックをする）を使う。藤田も危険な男だ。

桜庭　－　藤田のMMAルールでの試合も見たかった。ミドル級の桜庭と、ヘビー級の藤田ということで、少し桜庭は不利ではあるが、桜庭　－　ミルコや、藤田　－　シウバが実現していると考えると、こういう試合もありだろう。寝技に持ち込めば、桜庭が１本を取る可能性もあるだろう。私としては、UFC殿堂入りに藤田が選ばれなかったことは残念だ。（終）

２０２０年9月28日（月）

RIZIN. 24で、全日本の外国人プロレスラーのディラン・ジェイムス、また、噛ませ犬、役。

RIZIN.24のリングで、外国人とはいえ、またプロレスラーがMMAに挑戦して敗れ、噛ませ犬となった。その度胸は買いたいが、プロレスファンから見ると、「またか！」という感じで少し情けない。

試合は、元、力士で「貴ノ富士」の、スダリオ剛（23歳）。元、十両、身長１９０cm、体重１１２kg。相手は、「怪力キャノンボール」ディラン・ジェイムス（29歳）。ニュージーランド出身、全日本プロレス所属の、第82代世界タッグ王者。それ以前はZERO１で世界ヘビー級王者や、NWA UNヘビー級王者にも輝いている。アマチュアレスリングは15年。身長１９５cm、体重１０７kgである。大相撲　－　プロレスの対決という見方もできる。

まず、スダリオ剛が殴りに行き、２人共殴りに行くが、両者交わし合う。

スダリオ剛が立ち技で、ジェイムスの鼻に鋭いストレートを一発入れる。

ジェイムスもアマレス仕込みのタックルに行くが、スダリオ剛は相撲をやっていたから、腰も強くて、がぶる。

スダリオ剛はがぶって、ヒザを浴びせるとか、リフト式に落としていく。

スダリオ剛ががぶって、力が強いのか、ジェイムスは外せない。

スダリオ剛、１ラウンド終了間際、相手を仰向けにすると、パンチやヒザを当てた。

ジェイムスは、鼻から大量の出血。

１ラウンド終了で、ドクターストップ～TKOでスダリオ剛の勝利。

〇スダリオ剛　１R　ドクターストップ～TKO　●ディラン・ジェイムス

という結果で終わった。

あくまでプロレスファンの私のファン心理で言わせてもらえば、確かに実力の差はあったかもしれないが、ジェイムスはプロレスだったら出血くらいで、試合終了にはならないという意地を見せて欲しかった。ジェイムスは２ラウンドに入る時に、かつての藤田和之がミルコ・クロコップの膝蹴りをまともに食らって大流血をしてレフェリーストップで敗れたが、その時も藤田はプロレスラーの意地を見せるように、「俺はまだできる！」とアピールしていたが、あれは正直止めて正解だった。ジェイムスは、ドクターストップで負けが決まっても、「はい、そうですか」というように悔しがるでもなく、負けを認めてしまった。まだ２ラウンドにいけば、ジェイムスにもチャンスはあるのではと思ったが悔しい。やはり、ジェイムスはアマレス15年という経験があっても、打撃の部分で心が折れた可能性はある。またしても、MMAファイターにプロレスラーは噛ませ犬として使われてしまった。もしかしたらジェイムスには、負けてもファイトマネーだけはたっぷり入ったかもしれない。やはり、ブロック・レスナーのようなMMA系のプロレスラーではないと、純プロレス型のプロレスラーは通用しないと再確認するような試合だった。でも、私はこういうのは嫌いではない。(終)

２０２０年10月21日（水）

藤波辰爾についての考察。ヘビー・ジュニアでも強い。息子のLEONAがプロレスラー宣言。

私は、１９９９年から新日本プロレスを見始めたが、藤波辰爾（元、藤波辰巳）の覚え方は「藤波社長」という実況の言葉の入り方からだった。藤波は今、66歳のようだが、今も現役として活躍しているのは、はっきり言って凄いとしか言いようがない。日本プロレス、新日本プロレス、無我ワールド、ドラディションで活躍してきた。WWFジュニア王座を２回獲得し、WWE殿堂入りも果たした。IWGPジュニアヘビーは意外と獲っていないが、ヘビーに転向したのだろう。IWGP ヘビー級王者は、６回獲得したが、それは棚橋弘至の８回に抜かれた。だが、オカダ・カズチカも５回獲得でまだ藤波を超えていない。その他にも、さまざまなタイトルを獲得したが、さすがに書ききれない。つまり、ヘビーでも、ジュニアでも強かったレスラーだと言える。

ある日の、新日本の『ワールドプロレスリング』の番組で、藤波が「バイクを漕ぎながら、ジュニアに挑戦しようかなと思っている」と言っていたが、それは実現しなかった。あれは、何をやりたかったのかはわからないが、印象にある。

私は、新日本時代は、よく藤波の試合を見ていた気がするが、ドラディションを旗揚げさせてから、１回、後楽園ホールまで、藤波の試合を観に行った。藤波の息子のLEONAはまだプロレスラーではなかったが、進行役でマイクを握っていた。そして、どういう試合があったかは忘れてしまったが、メインイベントが藤波のチーム　－　TEAM２０００（蝶野正洋＆天山広吉＆ヒロ斉藤）という試合だった。試合後、藤波に対して、アントニオ猪木、藤原喜明、前田日明……など、後日の週刊プロレスでは、「金曜夜８時が蘇った！」というような表紙になる面々が並んでいた。非常に豪華だった。

このメンバーが控室に戻ったあと、LEONAが藤波と１対１になり、まだ、残っているお客さんの前で、「俺（僕？）プロレスラーになります！」と宣言した。すると、突然のことで藤波もビックリしたのか？　しばらく迷ったあと「とりあえず保留にしてくれ」といってその日は終わったが、いきなりのLEONAのサプライズを含めて、心に残り私はとても楽しかった。LEONAはその後、今もドラディションを中心だと思うが、プロレスラーとして活動している。頑張って欲しい、応援している。

藤波は、やはり顔がハンサムだと思う。66 歳でも相変わらずかっこいい。そして、技もドラゴン・スープレックスや、ドラゴンスクリュー、足四の字固め、ドラゴン・スリーパー・ホールドなど、藤波がニックネームで“ドラゴン”と呼ばれるから、日本式にはこの名前がつけられたのだろうか？　私は意外と知らない。武藤敬司や、棚橋弘至も似たような攻め方を継承しているが、武藤が解説で、棚橋が“ドラゴン殺法”を見せたら、「あれは、俺の技だ」と言っていたが、私は、武藤が藤波の技を使っていたイメージでもあるのだが……(笑)。

藤波には、長州力、天龍源一郎、ジャンボ鶴田などのライバルもいたが、藤波は現役。(終)

２０２０年10月22日（木）

２０００年～２００１年の、WCW（ワールド・チャンピオンシップ・レスリング)。

かつてのWCWは、２００１年３月まで活動していて、私はおそらく２０００年～２００１年３月の最終回までは、“マンデーナイトロ”や“サンダー”という２番組を毎週見ていた。
登場人物をどんどん書いていくが、マグニフィセント・セブン（７人の侍)、(スコット・スタイナー、リック・フレアー、ジェフ・ジェレット、バフ・バグウェル、レックス・ルガー、リック・スタイナー、アニマル・ウォリアー）だ。
その下にコミッショナーの（ザ・キャット（アーネスト・ミラー)、マイク・サンダース）がいたりした。
若手はNBTーナチュラル・ボーン・スリラーズ（マーク・ジントラック、ショーン・オヘア、ショーン・スタージャック、チャック・パルンボ）などがいた。
ユニットでは、チーム・カナダ（ランス・ストーム、マイク・オーサム、エリックス・スキッパー、メジャーガンなど)。
フィルシー・アニマルズ（素顔のレイ・ミステリオJr.、コナンなど)。
ミスフィッツ・イン・アクション（ヒュー・モラス（ビル・デモット）など)。
ダーク・カーニバル（グレート・ムタ、バンピーロ、ICP（インセント・クラウン・パッシー）など)。
クロニック（ブライアン・アダムス、ブライアン・クラーク)。
クルーザー級には、日本人選手では(カズ・ハヤシ)がいた。
ベビーフェース陣営は、スコット・スタイナーが次々に倒した破壊者リストからしかわからないが、(スティング、ブッカーT、(ビル)・ゴールドバーグ、シッド・ビシャス、ケビン・ナッシュ、DDP（ダイヤモンド・ダラス・ペイジ))。といった面々である。
マグニフィセント・セブンはいわばヒール（悪玉）ユニットだったが、スコット・スタイナーは必殺技のスタイナー・リクライナー（キャメルクラッチ）を武器に強いチャンピオンだった。ある時は、カズや他３人の、合計４人をまとめてスタイナー・リクライナーで４人共ハンバーガーのようにタップさせたこともある。ジャレットはフレアーと組んで、ダスティ・ローデス＆ダスティン・ローデスの素顔の、親子タッグと試合して、馬のケツに顔を押しつけられたほうが負けという試合で、ローデス親子が勝利を収めた。ジャレットは、今はWWEの内部で働いているが、ダスティン・ローデスはAEWで戦っている。２０００年から２００１年に移り３月、WCWがWWEに吸収されることになった。最終回では、フレアーとスティングが戦った。そして、WCW世界ヘビー級選手権では（王者）●スコット・スタイナー　ー（挑戦者）○ブッカーTという結果でWCWは解散した。(終)

２０２０年11月17日（火）

ジョージ・トラゴス（ルー・テーズの師匠）の、「レスラーは骨を折らねばならぬ時がある」。

『鉄人ルー・テーズ自伝』（ルー・テーズ＆流智美／講談社＋α文庫）。参照。
ジョージ・トラゴス：相手の骨を折る必然性があるときは、ためらわずに骨を折らねばならぬ。それができなければ、お前は永久に偉大なレスラーにはなれない。
（以上、引用）。

ジョージ・トラゴスとは、ルー・テーズのプロレスの師匠である。

『猪木力 不滅の闘魂』（アントニオ猪木／河出書房新社）。参照。
・アリと闘ったことで、パキスタンからアクラム・ペールワンという国家的英雄からの挑戦を受けた。（中略）殺し合いみたいな試合になってしまった。結果は俺が相手の腕を折って勝った。
（以上、引用）。

この試合で、猪木はいくらペールワンの腕にダブル・リストロックをかけても、「ギブアップ」をしなかったから、最後は、猪木がペールワンの腕の骨を折ったようだ。猪木は「あれは、腕は使い物にならないくらいバラバラになったはずだ」と話していた。

最近のWWEの“NXT”にも、ティモシー・サッチャーという、歯並びもグチャグチャで少し奇妙で怖いスーパースター（プロレスラー）がいる。このサッチャーが練習生などを見本にして、画面に向かって「技はこのようにかけるのだ」といって、練習生と向き合って、関節などを極める。すると、練習生はタップをするがサッチャーは離さない。練習生はうめき声を上げながらタップし続けるが、ずっと離さないで、ようやく最後に離すというのがある。何か、この辺のギミックはトラゴスに似ていると言えば恐れ多いが、そんな感じを受ける。

同じくWWEでは、２０１２年４月にブロック・レスナーがWWEに復帰した。ある日の“ロウ”で、トリプルＨの態度が気に入らなかったのか、レスナーはキムラロックでトリプルＨを骨折させた。トリプルＨは以後、腕を吊ってしまったが、特番“サマースラム”でも、レスナーはトリプルＨにキムラロックで勝利。しかし、特番“レッスルマニア29”ではトリプルＨが遂に勝利した。だが、次の特番でレスナーが決着をつけた。

トラゴスのような人物が現在もいれば、レスラー生命を絶たれる選手ばかりかも。（終）

２０２０年11月19日（木）

オースチン　－　ホーガンは、１勝１敗で引き分け決着でも、実現して欲しかった。

WWEでは、かつて、“ストーンコールド”スティーブ・オースチンとハルク・ホーガンが、同じ時期にリングに上がっていたことはあったが、シングルマッチは実現しなかった。

私の記憶では、オースチン＆ザ・ロック（現、ドゥエイン・ジョンソン）　－　nWo－ニュー・ワールド・オーダー－（ハルク・ホーガン＆ケビン・ナッシュ＆スコット・ホール）という試合で、オースチンとホーガンは遭遇している。それだけでも満足ではないか？　と言われそうだが、やはりオースチン　－　ホーガンのシングルマッチが見たかった。

でも、これだけのキャリアがあり、アイコンのある２選手が、わざわざ、自分の価値を懸けてまで戦うのは、両方、嫌だったかもしれない。１勝１敗で最後引き分けて、五分五分に見せるという手もあるが、最初の１勝をファンに都合よく印象されてしまうこともある。いきなり引き分けならば、一番いいのだろうが、ファンが納得しにくい。昔のプロレスのような不透明決着になってしまい、ファンは納得しない。

最近の WWE でも、３試合くらいの特番を使って、完全決着に持ち込むというケースが多い。ランディ・オートン　－　ドリュー・マッキンタイアの、WWE王座を巡る戦いは、五分五分になり、完全決着をつけるという形だ。

新日本プロレスでは、最近では、内藤哲也　－　EVILが、２冠王やＧ１ CLIMAXの争いで、今年、４度目くらいの戦いになると思う。私は、いくらまたＧ１で、内藤がEVILに負けているとはいえ、違うレスラーを挑戦者にして欲しかった。そこまでムキになっていないが、少し飽きてしまう感覚がある。

また、２０００年代の新日本になるが、全てシングルマッチの話で、まず、蝶野正洋　－　三沢光晴があり、30 分引き分け決着、今、思えばそれで良かった。蝶野　－　小橋建太もあった、これは、小橋が蝶野を圧倒して勝った、蝶野は足を怪我していたが。当時の G1 CLIMAXでは、蝶野　－　秋山準があり、30分引き分け。蝶野と川田利明は戦ったようだが記憶にないし、田上明とは、戦ったかわからない。おそらく、どの試合も再戦はなかったと思う。

オースチン　－　ホーガンに戻ると、昔のアメリカンプロレスのように、３本勝負にしても良かったかもしれない。お互いに丸め込みからポイントを稼いだりして、最後は場外での争いになって、リングベル。しかし、書きながら思うのは、それならやらなくてもいいのではないか？　という気もする。でも、やはりそこに、オースチンとホーガンが戦うという図式。入場や、リング上での存在感（オーラのようなもの）が集まって、ファンが必死に声援を送るということで満足となるのかもしれない。さすがにこの、オースチン　－　ホーガンの一戦はおこなわれないだろうが、今後は夢のカードは見たいから実現させて欲しい。(終)

２０２０年12月13日（日）

WWEは、WCWのあとに、K-1と抗争しかけたのか？　K-1の石井和義館長、WWEを挑発！

いわゆるグーグルで、ググれない（検索を探しても、探し物が見つからない）為、私の記憶の中での、元K-1、石井和義館長の言葉を使わせてもらいます。だから、多少、間違っているかもしれませんが、あまり問題はないと思います。

まずWWEは、２００１年にWCWを吸収した。
日本でも、WWEの人気が上がっていた頃でもあった。世界一のプロレス団体として君臨していた。

しかし、日本ではK-1（キックボクシング）や、PRIDEなどの人気が出て、新日本プロレスを初めとする、プロレス界は暗黒期と呼ばれ、人気が低迷していた。

そして、当時、K-1の代表的な役割りの石井館長が、ゴールデンタイムのテレビ放送の中、エンディングでマイクを持った、ここがさっきのググれなかった場所だが、「（プロ野球）、（Jリーグ）←これはケロちゃんこと田中秀和リングアナかな？　PRIDE、新日本プロレス、そして、WWE！　どこの挑戦でも受けます！」と強く語った。
私は、K-1というキックボクシング中心の団体が、WWEの名前を出したことにワクワクした。

事実、K-1とWWEは、世界のテレビ放送を、どちらのほうが多くしているのかを競い合っていた。

私が雑誌で見たところでは、K-1の会場に、当時、WWEのお偉方のジム・ロス（JR）（現、AEW－実況）、が視察に訪れ客席でメモを取っている姿もあった。

K-1と新日本は、MMAというスタイルで戦うことができたが、石井館長はおそらく当時は、WWEとの提携、共闘路線より、どちらが上かのマジの対抗路線を取りたかったと思う。
もし、戦っていたら、ピーター・アーツ、アーネスト・ホースト、ジェロム・レ・バンナ……などと、“ストーンコールド”スティーブ・オースチン、ザ・ロック（ドウェイン・ジョンソン）、トリプルH……などが、どういう風に戦ったのか？　想像すると楽しい。（終）

10．徒然。

２０２０年10月６日（火）

プロレスやスポーツが、エンターテインメント化されていく時代への嘆（なげ）き。

最近のプロスポーツなどは、お客様第一のエンターテインメント文化になってきているように思う。

例えば、私は昭和57年（１９８２年）生まれなので、昭和の記憶というものはほとんどないが、平成の文化はしっかりと経験してきたと思う。ちなみに今は令和の時代である。

野球の『珍プレー、好プレー大賞』などがたまにやると、昔の人気のないガラガラの野球場のパ・リーグなどの外野席では、カップルが耳垢（みみあか）を取っているとか、キスをしてイチャついているという光景もあったようだが、今は、プロ野球12球団の試合に限らず、サッカー、プロレス……などでも、そんな光景は見ることはない。それは、別にどちらの時代のほうが良かったかはわからないが、昔の時代のほうがけっこう放っておいてくれた気がする。

プロレスにしても、野球、サッカーにしても、ファンが駆けつけて、試合を見るという文化は、基本的に変わっていないと思う。プロレスでは選手が入場する時にパイロンが打ち上がるとか、炎が出るとか、レーザビームの光が出るなどの演出は、何もないより確かにファンとしては気持ちがいい。野球は、メジャーリーグから輸入した感じなのだろうか、ファウルボールの際「フューン！」と鳴るとか、チャンスでは「チャッチャッチャッ、チャララチャッチャチャ！」と鳴るとか、プロレスに入場テーマ曲があるように、野球でも選手の打席ごとのテーマ曲が流れる。今のプロレスや野球もそうだが、サッカーやバスケットボールのBリーグなどは客席自体が綺麗である。だが、Bリーグは１度だけ観戦経験があるが、ハーフタイムなどの間にも、キャラクターマスコットが競争するとか、フリースローをするとか、ないと退屈かもしれないが、これはエンターテインメントをやり過ぎではないか？

スポーツでは、これは昔からかもしれないが、会場（スタジアムなど）に入ってから、自分の座席がわからない際、スタッフが一緒に探して、手助けしてくれるというのもある。

こうやって考えていくと、今の時代のスポーツは、作られたエンターテインメントに誘導されているという見方ができて、便利で最高の物をプレゼントされるような作りになっている。私も、それは、非常に便利だから、いいと思う反面、昭和を知らないけど、昭和の良さというものが置き忘れられているような感覚も受ける。今に乗っかりすぎてもいけない。

平成というのは、今のまだ初めの令和とは、そんなに差を感じない。プロレスに関しても、今のアメリカンプロレスは、ロボットのような当たり前な動きをする試合をして、必殺技を出して決着する。まだ、日本のプロレスのほうが、アメリカンプロレスの要素も入ってきてしまっているが、人間の生々しい、髪を引っ張り合うなどの攻防が残っている。

私は、どんなプロレスを見るのも好きではあるが、昭和にはそこまでエンターテインメント性がなかったのではないか？　だから、昭和の人には本物を見る目があるのかも。（終）

２０２０年10月６日（火）

プロレスで、足四の字固めがかけられない世代、STFやクロスフェースが主流か？

私は、38歳で、20年以上のプロレスファンであるが、プロレスの一番有名と言ってもいい必殺技、足四の字固め（フィギュア・フォー・レッグロック）のかけ方がわからない。単純に今、友達もいなければ、プロレス仲間もいないというのが原因でもある。それにしても例えば、安生洋二などは、ある若い選手に「お前、足四の字固めがかけられないのか？　俺なんて足四の字固めはテレビで見ていて覚えたぞ」と言っていた。日本の少子化は進んでいるとはいえ、昔の世代の子供のほうが、ゴールデンタイムなどでプロレスを見て、学校などで掛け合ったりして覚えたのだろう。今の世代の子供（私の世代は含むかわからないが）は、プロレスファンとかでないと覚える子供もいないのではないだろうか。

私が、足四の字固めで思い出す選手は、ザ・デストロイヤー、リック・フレアー、武藤敬司くらいで、マニアックでは、ジェフ・ジャレット、Cody、ザ・ミズ、小川良成などだ。

最近は、足四の字固めよりも、STF（ステップオーバー・トーホールド・ウィズ・フェースロック）やクロスフェースという技が、プロレス界では多くなった気がする。私も昔、友達やプロレス仲間と、プロレスの試合をすることがあった。STF は兄弟から伝授されたが、不器用でなかなか覚えられなかった。クロスフェースに関しては、安生じゃないがテレビで見ただけで覚えて、使ったら相手はすぐギブアップをしていた。プロレスには手や腕に噛みつくというのも５秒以内は良いルールだから、噛みつかれなければ、クロスフェースは誰だってすぐに使える技だ。以前、金本浩二も「クロスフェースは一発だな」と語っていた。

昔、その草プロレスをしている時、足四の字固めの形だけ真似て技を出そうと足を回転させた時、このまま後ろに倒れないで、相手側にチャブ台型の逆立ちをしたらどうだろうと思ったが、もしかしたら相手の足の骨を折ってしまう可能性があると考えて、それはやめた。名付けて、足四の字ホールド「フィギュア・フォー・レッグ・ホールド」という技だが幻に終わった。しかし、以前、AEW のマットで Cody が、私の言うやり方とは違う滑らかな入り方だったが、変型の足四の字固めを見せてアッという間にタップを奪った。もしかしたら、私の考えも合っていたのかもしれない（笑）。

必殺技は、クリス・ジェリコは、ウォールズ・オブ・ジェリコ（ボストンクラブ／逆エビ固め）。ランス・ストームは、カナディアン・メープル・リーフ（逆片エビ固め）。長州力、スティング、ブレット・ハートは、サソリ固め（スコーピオン・デスロック／シャープシューター）。棚橋弘至は、テキサスクローバーホールドを使う。

このように古典的な技を（やや初心者向きの技を）必殺技に使う流れも特にベテラン選手には多い、これは良いことだ。最近の選手には古い技も重宝しつつ、新しい技もどんどん開発して欲しい。メチャクチャな技では駄目だが。

私は、足四の字固めを増やして、STF はともかく、クロスフェースの多用には反対だ。（終）

11. コラム。

２０２０年８月15日（土）

外道への「お前らの試合にはファイティングスピリットが見えない！」について。

『To Be The 外道 “レヴェルが違う！”生き残り術』（外道／ベースボール・マガジン社）参照。
・松永国松（故人＝後に全女社長。）さんに言われたんだよ。（中略）「お前らの試合にはファイティングスピリットが見えない！」ってね。（中略）ルチャリブレの真似事のようなプロレスをしてしまっていた。それで会場がダダ滑りして（中略）あの言葉は、オレがプロレスを続けていくうえで一生の財産だ。松永さんには今でも本当に感謝している。
（以上、引用）。
アントニオ猪木にしても新日本プロレスの会長として、「もっと戦いを魅せろ！」「もっと怒りを魅せろ！」と言う時代があった。前述した松永さんにも全日本女子プロレスの社長として「戦う魂を魅せるということが大事」だと言いたかったのだろう。
外道は、私は完全に知っているわけではないから勝手なことは言えないが、昔はアメリカンプロレスのようなプロレスが好きだと言っている。今の新日本でBULLET CLUBで、マネージャーとして、ジェイ・ホワイトのアシストに入るやり方なんかもアメリカンプロレスのスタイルに私は思える。話は戻るが、当時のメキシコでの外道は、ルチャリブレのようなプロレスを展開して飛んだり跳ねたりしたのかはわからないが、それは松永さんからすれば『お遊戯』にすぎず、お客さんもシーンとして盛り上がらなかったようだ。でも、外道は松永さんの言葉の「リングは（プロレスとは）戦う魂を魅せる場所だ！」という考えがモロにハートに突き刺さったようだ。だから、今の外道は、基盤となるアメリカンプロレスも身につけている。ルチャリブレはどのくらい取り入れているかわからないが。そして、ほぼ主戦場にしている日本のプロレス。その日本の戦いの魂の部分。のプロレスもミックスされたようなコンプリート・プレイヤー（全ての部分が完全に揃っている選手）と言えるのかもしれない。
猪木もよく言っていたように「この怒りのプロレス＝“闘魂”」は、力道山からアントニオ猪木などに受け継がれたが、これを受け継いでいるのは、例えば藤田和之といった辺りが、私の中では思いつく。でも藤田は、プロレスでは強いのにトップクラスで、マイクで喋り、引っ張っていくというタイプではない。猪木は「力道山から繋がるこの“闘魂”をお前らの代が受け継がないで誰が継ぐ？」と言っていた。私は、「昔とは時代が違うだろう」とは思わない。外道にしても、国松さんから「ファイティングスピリットが見えない」とあの時言われなければ、アメリカンプロレスチックや、ルチャリブレチックな、ファンに全くうけない売れないレスラーになっていたかもしれない。でも、外道は頭を働かせることは“天才”だから、どこかで気づいていただろう。今の外道はベテランだから、試合の塩梅（あんばい／加減）も把握している中で戦っていると思う。最近はマネージャー中心で、新日本でも頭をよく使った試合が多い。今後も外道は、戦う魂のある試合を魅せてくれるだろう。（終）

２０２０年10月15日（木）

スイーツ真壁（刀義）は、世間では棚橋弘至やオカダ・カズチカよりも、知名度がある。

『プロレスに復活はあるのか』（蝶野正洋／青志社）参照。
・棚橋弘至と真壁刀義を比較してみたら、棚橋はずっとトップを張り続けて頑張っているが、世間的にはやっぱりテレビに出ている真壁の方が知られているかもしれない。もっと言えば、現在のIWGPヘビー級王者のオカダ・カズチカがどれだけ世間に認知されているかというと、正直、厳しいかもしれない。（以上、引用）。

真壁刀義は、朝のテレビ番組で、スイーツを食べるコーナーに出ていることから「スイーツ真壁」と世間では呼ばれているようだ。私は、昔、ちらっと見た記憶はあるが、朝には起きず、昼に起きている為、「スイーツ真壁」の真壁刀義を、ほとんど知らない。だが、テレビ朝日の新日本プロレスの『ワールドプロレスリング』には、あまり試合には出てこないが、解説をしたりしているので、そちらではよく見る。つまり、『ワールドプロレスリング』だけ見ている私からすると、真壁より、棚橋やオカダのほうが有名に映る。しかし、「スイーツ真壁」を見ている人からすると、『ワールドプロレスリング』を見ていなければ、真壁のほうが、棚橋やオカダよりも有名に映るのだろう。つまり、プロレスマニアは、棚橋、オカダのほうが有名。でも、世間では、真壁のほうが有名となる。

先日、あるプロレスをよく知らない方に、新日本プロレスの歴代IWGPヘビー級王者の表を見せた。そこには選手の名前が書いてある。すると、まず、「真壁と棚橋は知っている」と言い、「佐々木健介も知っている」と言い、「武藤敬司や蝶野正洋」も知っていて、「アントニオ猪木」も知っている。「長州力と藤波辰爾はどっちがどういう顔かわからないが知っている」と言っていた。つまり、特に、佐々木健介の例からも分かるが、妻の北斗晶と健介がたくさんテレビに出ることによって、世間のプロレスを知らない人にも届くのだと感じる。ジュニアだからこの表にはなかったが、おそらく獣神サンダー・ライガーもよくテレビに出ているようなので、プロレスファンだけでなく知名度はあるのではないか？　ここに出した面々は、私はほとんどバラエティ番組や、スポーツ以外のテレビを見ないので、どれだけ出ているかわからないが、テレビに積極的に出ているのだろう。だが、前述した、蝶野の本の中にもあったが、棚橋弘至やオカダといった面々はプロレスファンには人気があるかもしれないが、世間の知名度としては厳しいかもしれない。苦手かもしれないが、喋りの巧い人とテレビに一緒に出たりして、プロレスを広めるのもレスラーは役目かもしれない。

話は一旦変わるが、昔、ある知り合いに、「中邑真輔」の「邑」って「あれなんて読むの？」と言われたことがある。答えは「なかむらしんすけ」で「むら」だ。今でこそWWEで「Shinsuke nakamura」という、英語でも、日本語でもいい形になっているが、「邑」だけで名前が覚えられないのはしょうがないことだ。

プロレスラーはハードスケジュールだと思うが、積極的に世間に出ていくべきかも。（終）

２０２０年10月17日（土）

棚橋弘至に、最終的に戻ってくれば、プロレスファンにとって一番心強い。

私は、新日本プロレスの棚橋弘至を、おおよそデビューの時から知っている。２００２年に中邑真輔も新日本に入団して、やがて、２大エースになるのだが。しかし、私は、棚橋の２０００年代初め～中盤の頃は見ていたが、プロレスを見られない時期もあり、IWGP ヘビー級王座を初戴冠した頃も知らなかった。２０１１年頃か、２０１６年頃か、気づいたら棚橋が新日本のエースとしてトップを走っていて、２０１６年は中邑が WWE に移籍した年でもある。

私は、２０１０年代から改めて新日本を見始めた時、新日本を毛嫌いしていた面もある。棚橋がとにかく普通すぎて面白くないと当時は思っていたし、中邑は WWE に挑戦して凄く応援したが、オカダ・カズチカが台頭して、内藤哲也はまずまず応援していた。以前から、飯伏幸太が「２人の神がいて、１人は棚橋さん。もう１人は中邑さん」というコメントをしていたが、当時の私は新日本のそういうことがよくわからなかった。

多分、２０００年代のアントニオ猪木の時代や、格闘技の出現……などの時代のインパクトが強すぎて、例えば、なんで、棚橋　－　中邑のような普通のプロレスラー２人のシングルマッチが面白いのか？　という印象を持っていた。私は、武藤敬司、蝶野正洋、ドン・フライ、スコット・ノートン、藤田和之、小川直也……といった試合は楽しめたが第３世代を含め、それ以降の世代が楽しめなかったのだ。

しかし、ずっとここ４年くらい継続して、新日本の『ワールドプロレスリング』を見続けていると、棚橋を初め、オカダ、内藤、飯伏……などの若い世代のプロレスが、今更ながら面白くなってきた。血液型が０型の、世渡り上手の棚橋についていったほうが、昔のプロレスも大事なメモリー（思い出）だけど、現在のプロレスを真正面から楽しめると思った。

繰り返すが、私は、１９９９年の新日本の、東京ドーム大会という、大仁田厚　－　佐々木健介とか、小川直也　－　橋本真也という強烈なインパクトのある試合からテレビで見始めて、その後、MMA にプロレスラーが挑戦していくというところから入っている。そして、時代的に武藤と蝶野の抗争などは楽しめたが、２人が第一戦から退くと、新日本は、IWGP インターコンチネンタル選手権、（王者）中邑真輔　－　棚橋弘至とか。IWGP ヘビー級選手権、（王者）オカダ・カズチカ　－　（挑戦者）内藤哲也のようなカードでメインイベントをファン投票で決める、なんてわけのわからないことを張り合っていた。

しかし最近、MMA に対しても、棚橋弘至という存在が、プロレスファンの私を守ってくれている気がする。最近はオカダや内藤が真のトップにいるが、棚橋はジョバー（負け役）になっていても、少しは商品価値や人気は落ちたかもしれないが、それは別にいいと思う。プロレス界にとって、棚橋を応援してついていけば問題ないという存在になっている。（終）

２０２０年10月24日（土）

鈴木みのるの、プロレスラー、格闘家は、お客に『ありがとう』以外で謝ってはいけない。

『ギラギラ幸福論 白の章』（鈴木みのる／徳間書店）参照。
・（ある格闘家に）「おまえがプロを名乗るんであれば『ありがとう』以外で頭を下げたらダメだ。誰ももうおまえのことを応援しなくなる。ファンがおまえを下に見るぞ」
・猪木さんが「うるせえ！俺が頭を下げたら誰も見に来なくなるぞ！」って。「出した結果がたとえ客が求めるものと違っても、それに対して謝ったら客に媚びなきゃいけなくなるぞ。だったらテメーらが頭を下げてこい！　俺は頭を下げない！」（以上、引用）。

まず、前述した最初の、鈴木が格闘家を叱っている例で感じるのは、私はそこまで格闘技を詳しく見ているわけではない。だが、特に若い格闘家が、試合に負けて（判定勝ちのケースなどもあるが）、両手を前に出して、お客さんに礼をして謝っているシーンがある。あれは、鈴木が言うように「何か嫌だな！」という感覚を受ける。

プロレスでもリング上で謝った例がある。大阪ドーム大会だったと思うが、新日本　ー　猪木軍の対抗戦で、アントニオ猪木がカードを決めた。最初カードは、メインイベント、IWGPヘビー級選手権、（王者）佐々木健介　ー　（挑戦者）藤田和之。セミファイナル、スコット・ノートン　ー　橋本真也だったが、その大会の前の興行で、ノートンが健介を破り、IWGPヘビー級王者がノートンに変わってしまった。そして、ある日、健介が戦う予定だった藤田に「（IWGPヘビー級の）ベルトを取られてすまんかった」と謝ったのだ。それに対して、藤田もお客も誰も怒っていなかった。しかし、１人怒っていた人物が、猪木だ。猪木は「戦う前から謝っている奴と試合をしても面白くない」と言ってカードを変えた。セミファイナル、IWGPヘビー級選手権、（王者）スコット・ノートン　ー　（挑戦者）藤田和之。メインイベント、佐々木健介　ー　橋本真也にした。ゴールデンタイムの枠だったが、まともに放送されたのは、IWGP ヘビー級戦のほうだった。藤田も猪木に食いつくように「やる前から謝っている奴とはやっていられない」と言っていたが、その発言に関してはずるく感じた。まとめると、健介のリング上での藤田への「すまんかった」の謝りを、猪木が許さなかった形だ。

冒頭の文は、鈴木の本から参照させてもらったが、鈴木が謝った？　例で思い出すのは、獣神サンダー・ライガーの引退ロードで対決して、（ライガーは途中、鬼神ライガーになったのか？　忘れてしまったが、）最後は鈴木がライガーから３カウントで勝利した。すると、リングに倒れているライガーに、鈴木が土下座のような形で礼をした覚えがある。これは、鈴木からすれば、『ありがとう』という意味だから、良いということだろう。むしろ、そういう理屈をつけないで見たほうが、鈴木とライガーとの関係が深く見える。

そう考えると、プロレスラーは、そう簡単にはお客に媚びて謝らないなと感じた。（終）

２０２０年10月28日（水）

プロレスに、ボクシングは、負けたままでいいのか？

現在のプロレスファンは、プロレスに劣等感なくそのままエンターテインメントとして楽しんでいるファンも多いと思う。だから、他の格闘技と切り離して見ているファンも多いかもしれない。

一方のボクシングは、相変わらず人気があり、ビッグマッチはテレビのゴールデンタイムで放送されることも多い。ボクシングファンはボクシングが好きだから、プロレスに対抗心を燃やすことはないだろう。

しかし、プロレスファンの私からすれば、一般の新聞（東京スポーツを除く）に、ボクシングの試合は真剣勝負として記載されるのに、プロレスは記載されないという劣等意識があっても当然なところだ。更に、今の新日本プロレスは盛り上がっているが、ビッグマッチを組んでも、ゴールデンタイムや夕方に放送されるということもなく、深夜放送という状態が続いている。ここではボクシングの勝ちだろう。

私が、プロレス　－　ボクシングで知っている試合は２試合。１つ目は、有名なアントニオ猪木　－　モハメド・アリ。２つ目は、高田延彦　－　トレバー・バービック。の試合である。他にも、ビッグ・ショー　－　フロイド・“マネー”メイウェザー・ジュニア。ブラウン・ストローマン　－　タイソン・フューリーという試合はある。しかし、猪木や高田の試合はガチンコ勝負だが、他の２試合は、WWEの、プロレスのリングでのアングル（シナリオ）のある勝負だった。

猪木　－　アリは15ラウンド戦った末、引き分けに終わった。これで、昔から続く２大格闘技プロレスとボクシングは、互角に思えた。しかし、ボクシングでアリに勝っているバービックが、UWFインターのリングで高田と闘った。試合は高田のローキックの連発で、バービックがリングから逃げ出す形となり、高田が勝利。これには、“鉄人”ルー・テーズも「ようやくプロレスとボクシングの、どちらが強いかということを、高田がバービックを破ったことにより証明してくれた」というようなことをコメントしている。

しかし、プロレスは、MMAのリングで負け続けた。ボクシングは同じ立ち技のK-1（キックボクシング）では、バター・ビーンなどが挑戦したが、あまりにも不利なルールのせいか、結果が残せなかった感がある。

やはり、プロレスもボクシングも、自分の競技のルールで戦うのならば勝てる。ボクシングルールで、井上尚弥選手に、那須川天心選手が勝てるかは微妙だし、過去のマイク・タイソンにボブ・サップが勝てたかは微妙だ。無論、ボクシングルールに、プロレスラーが挑むのは難しい。だから、バービックの敗戦で時間が止まっているのなら、異種格闘技戦を。プロレスのアングルをボクサーが飲むのならば、そのやり方でボクシングが勝てばいい。(終)

２０２０年11月５日（木）

日本のアスリートは、日本のプロレスのほうが、アメリカンプロレスよりも好きな傾向。

『再起は何度でもできる』（中山雅史／PHP）参照。
・僕は四十年以上にわたるプロレスファンだ。アメリカのエンターテインメント性が強いプロレスよりも、リング上で熱い戦いをしてくれる日本のストロングスタイルに惹かれる。その代表でもある新日本プロレスが大好きだ。（以上、引用）。
『ワールドプロレスリング』ラグビーW 杯２０１９日本代表 ツイ ヘンドリック　参照。
・新日本プロレスはレスリング自体が素晴らしい 海外のプロレスと日本のプロレスとは別物です 日本はストーリーよりもレスリング自体にフォーカスがあたります だから日本のプロレスが好きなんです（以上、引用）。
今回は、最近、発売された、サッカーの中山雅史選手の本と、今年の１月５日の東京ドーム大会での、ラグビーのツイ ヘンドリック選手のインタビューを引用させていただいた。
私は 38 歳で、新日本が１９９９年から約 21 年間。アメリカンプロレスは２０００年から約 20 年間見ている。（見ていない時期も含む）。
これを書き始める前、風呂場で本を読みながらいろいろ考えていたのだが、「確か、中山選手の本も、ヘンドリック選手のコメントも、アメリカンプロレスよりも、日本のプロレス、特に新日本プロレスに惹かれると書いてあったし、言っていたよな」と思って、保留にしておいた。そして、WWE の“ロウ”という番組を見て、私は、新日本もいいけど、WWE のほうが楽しいな、という感覚になっていた。
それでも、中山選手は、私の倍の四十年に渡るプロレスファンというのは驚きだ。先に書くと中山選手で思い出すのは、ここでは詳しく書けないが、１９９３年のＷ杯アメリカ大会最終予選、イラン戦で、「ゴールラインに割りかけていたボールをなぜ追いかけたのか」そして、「角度のないところからゴールした」というシーンだ。私はそれを見た時はまだ子供だったが、今までで一番と言っていいくらい感動したゴールかもしれない。
中山選手や、ヘンドリック選手も、アメリカンプロレスをたまには見ているかもしれない。例えば、プロ野球も勝負だけど、どちらかというと、サッカーやラグビーのような競技のほうが、コンタクト（衝突）スポーツだ。泥臭いというと言い過ぎかもしれないが、プロレスも同じコンタクトスポーツなので、響く点があるのかもしれない。テレビでもけっこうプロレス好きのサッカー選手が登場している番組もあった。
アメリカンプロレスは、中山選手の表現した「エンターテインメント性」や、ヘンドリック選手が表現した「ストーリー」という見られ方をしていると思う。しかし、アメリカンプロレス、例えば、WWE の選手も指示はストーリーだけど、１軍や、第３ブランド、出場を狙う練習生のレスラーなど、そこは新日本よりももしかしたら、ハードルは高い可能性もある。
でも、中山選手もヘンドリック選手も、生身の人間の熱い戦いが見たいのだと感じる。（終）

２０２０年11月28日（土）

WWEやAEWで、私が、日本人選手を応援することについて。

私が、昔以来、ふと見始めていたのは、パソコンのユーチューブでの２０１６年から、WWEの“NXT”に登場した、中邑真輔である。

そして、しばらく見ていると、“NXT”でのデビュー以来の連勝記録１７４連勝を超えたということでASUKAは盛り上がっていた。ASUKAは２０１５年～“NXT”にいたようだ。

それ以前からいたのは２０１４年からいる、今、新日本プロレスで活躍するKENTAことイタミ・ヒデオがいた。

私は、その頃は、中邑やASUKAの“NXT”での活躍や、メインロースター（１軍）での活躍に燃えていた。ちなみにイタミはカシアス・オーノと抗争して、キレていた（笑）。

２０１７年から、“第１回メイ・ヤング・クラシック”でカイリ・セインが優勝して、NXT女子王者にもなった。その後、カイリはメインロースターに昇格して、ASUKAと共に、カブキ・ウォリアーズというユニットを作る。WWE・女子タッグチーム王座にも輝いた。

２０１８年には、いよいよ柴雷イオがWWE入り、“メイ・ヤング・クラシック２０１８”では、トニー・ストームに敗れて準優勝。しかし、NXT女子王者に輝いている。

戸澤陽、KUSHIDAなどが活躍中。Sareeeはコロナ禍で、アメリカに行けず、日本で待機中。

AEWでは、初代AEW女子世界王者に、里歩が輝いた里歩はその後、女子プロレス団体、スターダムのリングなどで活躍している。

AEWの、第３代AEW女子世界王者には、志田光がなった。数々の防衛を重ね、AEWには、相手がいないくらいの実力である。

AEWでは、中澤マイケルも活躍中。ローション攻撃など楽しませてくれる。

（感想）カイリを除くと、１番好きなのはイオ。次がAEWの光。今、この２人はそれぞれの団体で女子王者である。ASUKA、中邑は順調。KUSHIDAも実力を見せている。戸澤も24／７王座争いをしている。Sareeeにも大期待。やはり日本人選手は応援したくなる。（終）

２０２０年12月５日（土）

プロレスは、宝塚やミュージカルと同じ。でも、プラス戦いという面がある。

　プロレスはエンターテインメントのショーなのか？　戦いなのか？　というところでは意見が分かれる。
　プロレスの試合はあらかじめ戦い方や勝敗が決められたショーという考えだけで見れば、宝塚やミュージカル、歌手のライブ、アイススケートのアイスショー……と変わらない物という見方ができる。

　でも、プロレスは、特に昔のプロレスは、戦いの要素があった。アントニオ猪木　ー　モハメド・アリや、ジャンボ鶴田　ー　天龍源一郎、UWF……などキリがないが、勝敗うんぬんは抜きにしても、戦いをやっていたもので、エンターテインメントのショーという見方をしてはいけない部類のものだったと思う。

　女子プロレス団体、スターダム所属の朱里は、好きな物として、宝塚やミュージカルというものを挙げている。プロレスも格闘技も一流でとても強い選手だが、マイクアピールで宝塚やミュージカルを真似したような、マイクパフォーマンスをしているようには見えない。それは朱里が単に取り入れていないだけだろう。でも、少しは取り入れているかもしれない。

　プロレスと、宝塚やミュージカルの違いは、プロレスは肉体をぶつけ合うコンタクト（衝突）スポーツなのに対して、宝塚やミュージカルはシナリオを演じるものだと思う。だから、プロレスには怪我というものが発生しやすい。そこはおそらく宝塚やミュージカルとは違う。

　かといって、プロレスが、野球やサッカー……などと一緒のスポーツかというと違う。怪我とか、そういう面にかけては同じだが、あらかじめ勝敗とアングル（シナリオ）が決まっているのがプロレス。でも、これは全てのプロレス団体ではない。本当に決着がつくまで戦っている試合もあるかもしれないし、多分、間違いなくたくさんあった。野球やサッカーは基本的に真剣勝負。でも、Ｊリーグはわからないが、海外や、イタリアのセリエＡなどは、八百長が頻繁におこなわれているとも言われ、そういう情報はわからない。

　シナリオがあるという部分では、プロレスと、宝塚やミュージカルは同じだ。最近のWWE、AEW、新日本プロレス、スターダム……などは明らかにシナリオが存在する。
　プロレスは、シナリオと戦いの２つがある不思議な競技。だから面白いのだろう。（終）

２０２０年12月18日（金）

内藤哲也がプロレス大賞、MVP&ベストバウトにみる、強すぎる一強の新日本プロレス！

最優秀選手賞（MVP）　内藤哲也
年間最高試合賞（ベストバウト）　東京ドーム、１．５（IWGPヘビー級＆IWGPインターコンチネンタル、ダブル選手権）　オカダ・カズチカ　－　内藤哲也
敢闘賞　高橋ヒロム

と８つの賞のうち、新日本プロレスの選手や試合が、３つと約半数、それも重要な賞。

これを見ると、プロ野球の福岡ソフトバンクホークスの強すぎる、日本シリーズ４連覇や、日本シリーズでの２年連続４連勝と重なる。
ちなみにサッカーJリーグ、川崎フロンターレも強かったが、連覇したわけではなく、来年はどうなるかわからないので、これは置いておこう。

やはり、今は、新日本は、土曜日の深夜１時から、30分間の『ワールドプロレスリング』のテレビ放送がついていることが大きいだろう。
私も、過去に、日本テレビで『全日本中継』が終了し、『ノア中継』が終了したあとは、全日本プロレスやプロレスリング・ノアは見なくなった、だから、新日本だけは見ている。
唯一、番組終了後ユーチューブで追っているのは、女子プロレスのスターダムくらいだ。
今後、WWEや、AEWがあるなら、私は、もし新日本のテレビ中継が終わっても、有料の『新日本プロレスワールド』には入らないだろう。もし新日本のテレビ中継が終了したら、ユーチューブで特別にアップされた、新日本の試合があれば見ると思う。
何を言いたいかといえば、未だにテレビの力は大きいということだ。

昔は、ジャイアント馬場の全日本（日テレ）と、アントニオ猪木の新日本（テレビ朝日）が、良いライバル関係をしていた。
そのライバル関係が続いたのは、おそらく全日本四天王（三沢光晴、川田利明、田上明、小橋建太）や、闘魂三銃士（武藤敬司、蝶野正洋、橋本真也）くらいまで。

今回は、ノアからは最優秀タッグチーム賞と殊勲賞が。DDT（DDT プロレスリング）からは技能賞が選ばれた。しかし、男子プロレスでは、新日本の強すぎる一強である。
女子プロレスでは、毎年、選ばれる場合はスターダムがほとんどでこちらも一強状態。
ノア、全日本、DDT……が本気で組まねば、新日本はプロ野球のソフトバンク状態だ。(終)

12. 表彰。

２０２０年９月８日（火）

私の好きな歴代プロレスラー順、30 位ランキング！

１、蝶野正洋　私の中では殿堂入りのプロレスラー。
２、武藤敬司（グレート・ムタ）　同じく、蝶野と共に、私の殿堂入りレスラー。
３、カイリ・セイン　WWE を離脱したが、女性で一番好きな選手だった。
４、ジェフ・ジャレット　WCW のギター攻撃でインパクトを受けた。
５、クリス・ジェリコ　WWE～今の AEW まで、影響を受けるカリスマ。
６、AJ スタイルズ　驚異的でかわいい、惚れる男子レスラー。
７、紫雷イオ　猫のような体操仕込みのムーブと、美しさの女性。
８、星輝ありさ　引退したが、かわいさとブラジリアンキック。
９、舞華　最近、スターダムで応援している、純な女性。
１０、志田光　AEW、第３代女子世界王者。優しそうな女性。
１１、ストーンコールド・スティーブ・オースチン　WWE が誇った、最凶野郎！スタナーも。
１２、ハルク・ホーガン　誰もが知る。プロレス界のスーパースター。
１３、ビル・ゴールドバーグ　WCW で新人からの無敗記録を作った、戦士。
１４、ジ・アンダーテイカー　引退したが、怪奇派、バイカー、としてかっこ良い。
１５、トリプル H　レスラーとしても凄いが、将来も WWE の重鎮か？
１６、スコット・スタイナー　WCW 時代の、私の大好きなチャンピオン。
１７、スティング　WCW の怪奇派であり、アイコンとして活躍した。
１８、スコット・ホール　ケビン・ナッシュと共に WCW をぶち壊した。
１９、ショーン・マイケルズ　WWE の主役で、セクシーアイドルの男子レスラー。
２０、アリスター・ブラック　最近のレスラーだが、非常に雰囲気を感じる。
２１、スコット・ノートン　nWo-JAPAN、TEAM2000 で活躍。IWGP ヘビー級王者も。
２２、ドン・フライ　アントニオ猪木の引退試合の相手。MMA スタイル。
２３、バティスタ　エボリューションなどで活躍。イタリア系の顔。
２４、ランディ・オートン　今もなおレジェントキラーなどと呼ばれ活躍中。
２５、リック・フレアー　NWA の歴代王座記録など、プロレス界のレジェンド。
２６、リック・スタイナー　弟、スコットと共に、容赦のないファイトスタイル。
２７、マリア・ケネリス　新日本プロレスでも、お色気攻撃で眩惑した女性。
２８、トニー・ストーム　かっこいい女性。「MYC」では決勝でイオに勝ち優勝。
２９、ナタリア　ハート家の血統の女性。実力もかわいさも一級品。
３０、ベッキー・リンチ　「I AM THE MAN」を名乗る女性。今は出産で離脱か？
３０、ジョン・モクスリー　WWE でも凄いが、特に新日本や AEW で実力開花。
○蝶野＆武藤が殿堂。カイリ＆イオなどが続く。ジャレット＆ジェリコ＆AJ も堅い。（終）

２０２０年10月18日（日）

蝶野正洋、武藤敬司、カイリ・セイン。私の中の殿堂入りプロレスラー３人。

私の中で、まだ現役の蝶野正洋、武藤敬司と、WWE離脱（WWEのサポートとして所属）までの情報があるカイリ・セイン。この３人は私の中で殿堂入りした感がある。だから、ここに３人のことを書いて、正式な私の殿堂入り選手とさせていただく。

・蝶野正洋

私は、１９９９年から、新日本プロレスの『ワールドプロレスリング』を見始めたが、来週の予告のシーンで、蝶野は正規軍にだと思うが、集団リンチのストンピングをされているシーンがあり、蝶野を知った。毎週見ているうちは私も誰のファンかわからなかったが、兄弟が「悠は（筆者は）蝶野でしょ？」と聞かれた時に、初恋の人のように、「自分は蝶野が１番ファンかもしれない」と思ったまま、裏切らないで今までずっと１番のファンできた。だが、別にいいのだが、「闘魂三銃士の１人」と聞いた時は、１人ではなくて３人で括（くく）られているのかとちょっと思ってしまったが、別にそれは気にしないし、今はそれがいいと思っている。東京ドームでのハルク・ホーガン戦、ジョーニー・ローラー戦、一連の武藤との抗争、三沢光晴戦、小橋建太戦。ユニットではnWo-JAPAN、TEAM-２０００、BLACK NEW JAPANなど格好いい。『２．１札幌事変』の神・アントニオ猪木との問答も尊敬する。

・武藤敬司

武藤は、同じく１９９９年の『ワールドプロレスリング』で、IWGPヘビー級王者として、トーナメントを勝ち上がった、挑戦者の佐々木健介の前に客席から現れた気がする。多分、私は「この選手（武藤）が一番強いんだな」と思いながら見ていたと思う。武藤は特に新日本で２回（IWGP ヘビー級選手権）、全日本プロレスで１回（三冠ヘビー級選手権）、天龍源一郎と合計３度に渡る選手権をしたのが印象的だ。アメリカではグレート・ムタとして活躍して、２０００年の落ち目のWCWの頃も、バンピーロなどと抗争して面白かった。ムーンサルト・プレスは使うのを禁止されてしまったが、未（いま）だ現役で、若手の有望株に勝つ姿は凄い。

・カイリ・セイン

私が、カイリ・セインを知ったのは、２０１７年のWWE・メイ・ヤング・クラシックトーナメント第１回大会で優勝を果たした時だ。新情報によれば、カイリは「日本でWWEの選手としてやっていく」とあり、サポートやアンバサダーをやるようだ。私のカイリのイメージでは、先日のWWE離脱で、「引退」というより「ネバー・セイ・ネバー（やるでもやらないでもない）」というポジションで、家庭に入り、もしかしたら子供が産まれて、子育てのあと、復帰するのか？　プロレスは辞めるのか？　だと思ったからだ。私は、カイリの試合をWWE日本公演で、生で観たので、それがとても楽しかった。犬好きのカイリもかわいい。

というわけで３選手とも現役のようだが、私の中では殿堂入りとさせてもらいます。(終)

２０２０年12月19日（土）

好きなプロレスラーの試合もいいけど、存在が好き！　どんどん新たな選手に恋したい！

　まず、私の好きな選手を、ザッと挙げてみよう。

殿堂入り：蝶野正洋、武藤敬司、カイリ・セイン。
男子プロレスラー：ジェフ・ジャレット、クリス・ジェリコ、AJスタイルズ。
女子プロレスラー：柴雷イオ、トニー・ストーム、志田光、星輝ありさ（引退）、舞華。

　といった感じだ。

　私は、プロレスという表現方法を使って、この方達を見ている。
　でも、私がプロレスファンではないとしても、例えば、誰かが、俳優、女優、男女アイドル、歌手、お笑い芸人、他のスポーツ選手……などに夢中になるように、プロレスで戦っている姿も好きだけど存在だけで惚れてしまう、というイメージがある。

　男子と女子の選手をいっぺんに挙げたが、多少の違いはあるけど、似たようなものだと思う。蝶野と武藤だけは、ちょっと違う種類の感じだ。

　例えば、私の中で殿堂入りした、蝶野、武藤、カイリなどは、好きだが、特別にユーチューブなどで昔の試合を見ようとはしない。ユーチューブの欄に上がっていたら見る可能性もあるが、それでも見るかはわからない。

　ジェフ・ジャレットは、今、WWEでプロデューサーに回ってしまったから、おそらく今後、試合をする可能性は少ないと思う。
　女子プロレス団体、スターダムに所属していた、星輝ありさは、今年２０２０年に引退している。
　ジャレットとありさを除くと、他の選手は、現役だが、やはり試合がなければ追うことはできない。今、どこにいるのだろう、という感覚になる。ありさの今はわからない。

　私の中で、現役の蝶野と武藤を除くと、好きな日本人男子選手がいないのが寂しい。

　やはり、試合をやっている時の選手がいいが、一度惚れてしまうと、男子でも女子でも存在が好きになる。男子の選手も大切だが、女子の選手というのは、それ以上に異性ということで惚れてしまう。男女の選手をこれからも、新しくたくさん恋していきたいと思う。(終)

あとがきにかえて。　２０２０年 12 月 31 日（木）　文：岡本　悠

プロレス界、２０２０年、を私、岡本悠が対話形式で振り返る。

ーこんにちは。大晦日に。
悠：こんにちは。
ー今年は、まずプロレス界を語る前に新型コロナウイルスが流行しましたね。
悠：そうだよ。一応、中国から発生したということになっているけど、こんな言い方も失礼かもしれないけど、「コロナが憎い！」とか、テレビで喋っている人もいるけど、そういうことは、私は性格的に言わないな。確かに、これだけ世界中に蔓延しているから、今更、憎いと言ってもという気がしてしまうし、とにかくそう思いたくないんだ。
ー新日本プロレスや、女子プロレス団体スターダムは、無観客試合をするとか、興行が中止になりました。
悠：プロ野球や、サッカーのＪリーグ、日本のプロレスの他の団体も中止になったね。私も 38 年生きているけど、今、生きている１００歳くらいの多分、日本人、もしかしたら世界中を含めて、初めてコロナのようなものを味わったかもしれない。本屋にカミュの「ペスト」という本が置いてあるとか、スペイン風邪、アフリカの感染病……そう考えると、世界ではあったできごとかもしれないが。
ーWWE（ワールド・レスリング・エンターテインメント）と、AEW（オール・エリート・レスリング）は、それぞれ、同じ会場でコロナ禍になっても、興行を続けていました。その中からコロナに感染したスーパースター（プロレスラー）もいたようですが、アメリカでは、プロレスがないと困るという考えもあるようです。
悠：正直、私も、アメリカンプロレスがユーチューブで放送されていてくれたから、助かったという面はあった。アメリカはドナルド・トランプ大統領だったから、認められたという可能性もある。もし違う大統領なら、「ロックダウン」という可能性もあった。ジョー・バイデン（新）大統領は、どういう判断をするかわからないけど、出来る限り止めないで放送して欲しいね。
ーさて、今年からは、去年の WWE、AEW、新日本に続いて、スターダムも見始めましたね。最近は更に始まった、NWA（ナショナル・レスリング・アライアンス）の“ショックウェーブ”という番組も見ているようですが。
悠：WWE、AEW、NWA。ここにプラス本当はインパクト・レスリング（元、TNA）も見たいけど、ユーチューブで放送されていないのだよ。今年はスターダムを見始めて、テレビの放送も終わってしまったけど、ユーチューブでしっかり追いかけている。
ースターダムでは、星輝ありさ選手を応援していましたが、怪我が何かで引退されてしまいましたね。そして、その後は、ユニット、ドンナ・デル・モンドの舞華選手を応援しているそうですね。

悠：元々、スターダムからWWEに移籍した、カイリ・セイン（元、宝城カイリ）と、柴雷イオの２人がファンだったから、WWE部隊としては、カイリ＆イオ。日本部隊では、ありさ（引退後は）、舞華のファン。カイリは日本に戻って試合はしてないようだから、今は、イオと舞華、それから、AEWの志田光も物凄く応援している。WWEの外国人選手としてはトニー・ストームもね。

－ちなみに、今年は、悠さんは「アイディア・プロレスコラムDX（デラックス）」（岡本悠／幻冬舎）という本を作りました。どんな感じですか？

悠：じゃあ、何かが起きたのか？　というとそこまでないけど、細かいことを言うと、「ただ、まあ、もう」という言葉が多いとか、これはプロレスコラムに書かれたことがあることだけど、「主語がないから誰が話しているかわからない」とか、そういう耳に痛いことは、逆に役に立ったかもしれないと思っている。経営や営業は難しいと思ったし、２回目も高いお金を払ってやるのか？　と思ったけど、自分が改めてやり切るというところにも自信がなかったし、あと、あまり売れないで終わってしまう可能性もある。

－その後は、「アイディア・プロレスコラムMANIA・X（マニアックス）」という、製本を作って、赤字ながら無料で配る活動もしましたね。知り合いだけに。

悠：その知り合いの方達も、プロレスのことはよくわからない方ばかりで、もらっても困ったかもしれません。話は戻りますけど、絶対とは言わないけど、出版社から本を出すのは、お金の問題で多分しないでしょうね。

－今後、プロレス会場に興行を観に行くという可能性はありますか？

悠：これも話が戻ってしまうのだけれど、コロナ禍で今も安全かもしれないけど、この新規患者も増える段階では、観戦に行きたいとは思わない。私が出不精だということもあるけど、自分の意思というより、なんとなくタイミングが合えば、スターダムの試合は見たいね。あとは、WWE の ASUKA とカイリは、WWE 日本公演で観たから、イオと光の試合も生で観たい。でも、ユーチューブで見られるから、最近はだんだん生で観たいという気がなくなってきている。面倒だから。

－WWEの“レッスルマニア”とかは行きたくないですか？

悠：最近、思うのは、海外は行きたくないなってこと。本当は“レッスルマニア”を体感したいけど、その会場にいくまで、どうすればいいかわからない。私が行ける範囲は、東京ドームと後楽園ホール、両国国技館しかわからない。

－最後にプロレス界に向けてお願いします。

悠：私は、WWE、AEW、新日本、スターダム、（NWA）……などを見ていくことになりますが、時に感動したり、楽しんだり。時に、試合を見るのが面倒だけど、そういう状態でも見たりしていくと思います。今後も、好きな選手がいるとか、嫌いな選手もたくさんいると思いますが見ていきます。そして、プロレスコラムに書いて出していきたいと思います。

－大晦日、今日は、悠さん、ありがとうございました。

悠：こちらこそ。私も変わったことは書けませんでしたが、多分、プロレスが好きです。（終）